

財松江市教育文化振興事業団
文化財調査報告書 第5集

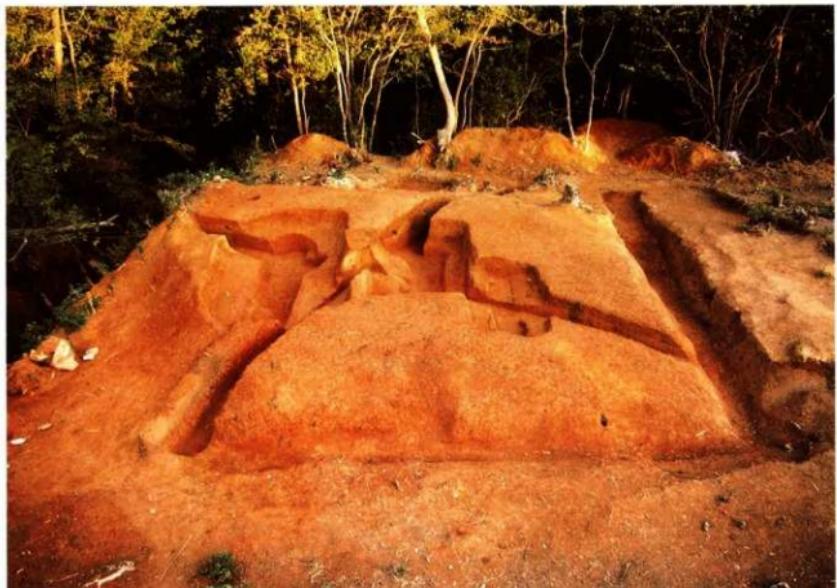


柴尾遺跡発掘調査報告書(Ⅰ)

(柴遺跡調査報告書含む)

1994年3月

松江市教育委員会
(財)松江市教育文化振興事業団



柴尾2号墳（西より）

例　　言

1. 本書は、平成5年度において（財）松江市教育文化振興事業団が、有限会社農和不動産が計画している（仮称）あじさい園地造成工事・（仮称）ニュー学園台園地造成工事に伴う事前調査として実施した「柴尾遺跡・柴遺跡発掘調査」の成果を整理して作成した発掘調査報告書である。

2. 調査の組織は下記のとおりである。

主　体　松江市教育委員会

教　育　長　諏訪　秀富

生涯学習部長　松尾　光浩（平成5年5月まで）

　　〃　中西　宏次（平成5年6月から）

文化課長　中西　宏次（平成5年5月まで）

　　〃　村松　榮　（平成5年6月から）

文化財係長　岡崎　雄二郎

調査者　主　事　昌子　寛光（平成5年6月まで）

調査補助員　伊藤　巖　（平成5年6月まで）

　　〃　富田　茂雄（平成5年6月まで）

財団法人松江市教育文化振興事業団埋蔵文化財課（平成5年7月1日新設）

理　事　長　吉岡　俊雄（平成5年7月から）

事務局長　日高　稔大（平成5年7月から）

調　査　員　江川　幸子（平成5年7月から）

調査補助員　伊藤　巖　（平成5年7月から）

作　業　員　安立　綾子・青山　安子・池田　京子・入江　常子

　　内久保　百合子・加納敬子・加納　マサ子・田村　年江

　　野津　椿夫・野津　千代子・原　千恵子

3. 調査にあたっては、土地所有者である西宗寺住職、高野　顯信氏より終始多大な協力をいただいた。記して感謝したい。

4. 遺構の実測は伊藤・江川がおこない、写真撮影は江川がおこなった。

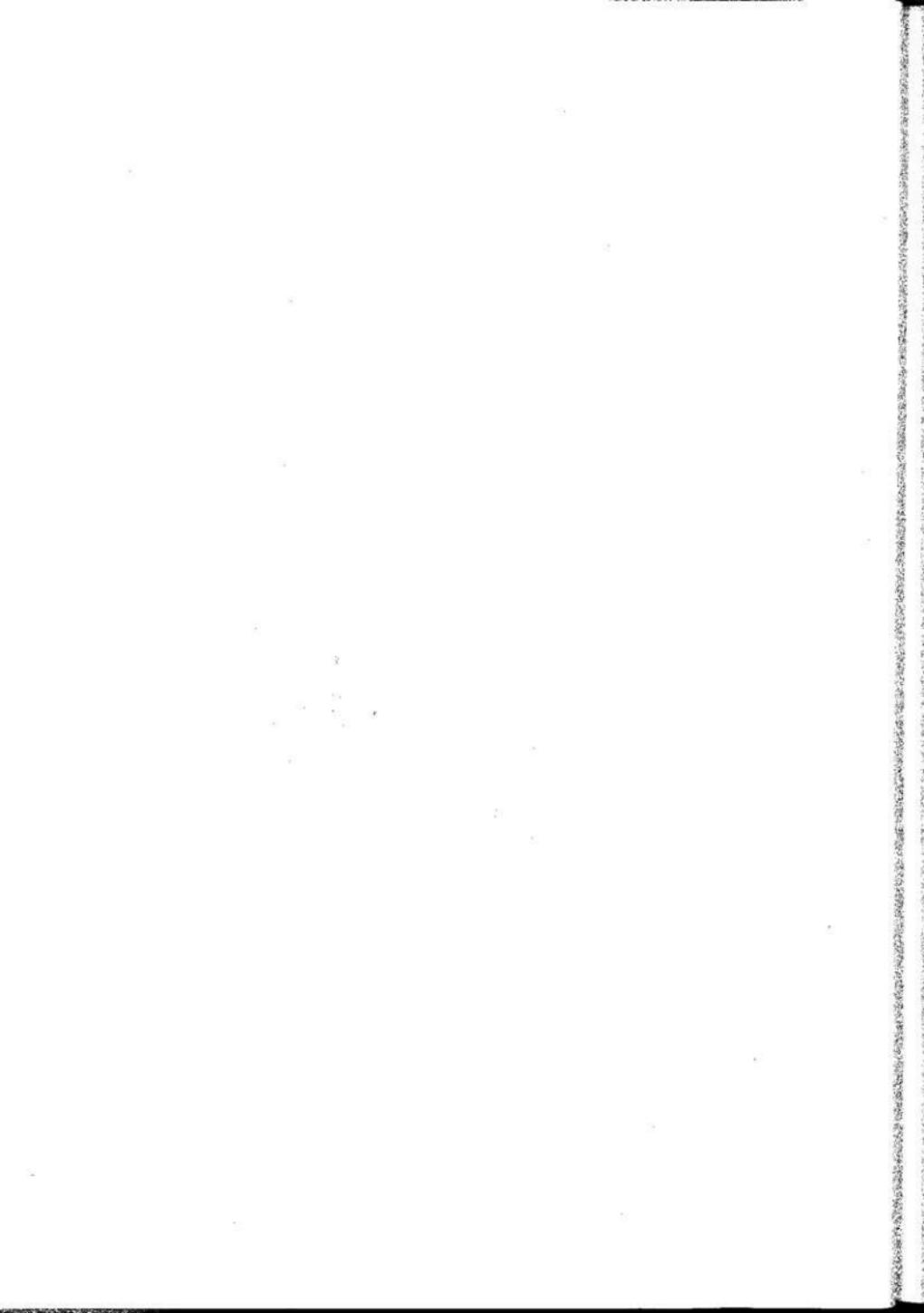
5. 図面中で使用した方位はすべて磁北を示しており、高さは海拔高を表している。

6. 遺物整理にあたっては、荻野　哲二（松江市教育委員会）の協力を得た。

7. 遺物については、北浦　弘人氏（鳥取県埋蔵文化財センター）、森　佳樹氏（鳥取県吉谷町役場生涯学習課）、川田氏（鳥取県東郷町役場教育委員会）の教示を得た。記して感謝する。

8. 遺物の実測、浄書、写真撮影、本書の執筆・編集は江川がおこなった。

9. ただし、柴遺跡に関しては、昌子の原稿に江川が加筆した。



目 次

I. 位置と環境	1
II. 調査に至る経緯	3
III. 調査の概要	4
IV. 柴尾1号墳	8
V. 柴尾2号墳	12
VI. その他の遺構	25
VII. 柴遺跡	37
VIII. 小結	40
X. 写真図版	41

挿 図 目 次

第1図 柴遺跡…柴尾遺跡の位置	1
第2図 柴尾遺跡発掘調査前地形測量図および調査成果図	6, 7
第3図 柴尾1号墳検出状況	8
第4図 柴尾1号墳周溝内出土上遺物実測図	9
第5図 柴尾1号墳セクション図	10, 11
第6図 柴尾2号墳検出状況	12
第7図 墳頂供獻土器出土状況	13
第8図 柴尾2号墳墳丘セクション図	14, 15
第9図 周溝内遺物出土状況	16
第10図 墳頂祭祀造構平而図・セクション図	17
第11図 柴尾2号墳1号主体部平面図・セクション図	18
第12図 柴尾2号墳2号主体部平面図・セクション図	19
第13図 柴尾2号墳3号主体部平面図・セクション図	20
第14図 1号主体部出土上鐵鐵実測図	21
第15図 墳頂出土遺物実測図	22
第16図 周溝内出土遺物実測図（1）	23
第17図 周溝内出土遺物実測図（2）	24
第18図 1区土壤平面図…セクション図	25
第19図 1区平面図・遺物出土状況図・セクション図	26
第20図 2区遺物出土状況図・セクション図	27
第21図 3区遺物出土状況図	28
第22図 4区遺物出土状況図	28

第23図	4区出土石棺実測図	29
第24図	石鏡実測図	32
第25図	大型スクレイバー実測図	33
第26図	スクレイバー実測図	34
第27図	スクレイバー実測図	35
第28図	剝片等実測図	36
第29図	柴遺跡試掘トレンチ配置図	37
第30図	柴遺跡試掘トレンチ（1～3）セクション図	38, 39

図 版 目 次

巻頭カラー　柴尾2号墳 完掘状況

図版1	発掘前尾根上平坦面と柴尾1号墳遠景	42
図版2	発掘前尾根上平坦面と柴尾2号墳（右側マウンド）遠景	42
図版3	柴尾1号墳発掘前近景	43
図版4	柴尾2号墳発掘前近景	43
図版5	柴尾1号墳残丘検出状況（南より）	44
図版6	柴尾1号墳周溝セクション（西より）	44
図版7	柴尾2号墳作業風景	45
図版8	柴尾2号墳周溝セクション（南より）	45
図版9	柴尾2号墳主体部平面プラン検出状況	46
図版10	柴尾2号墳主体部完掘状況	46
図版11	柴尾2号墳墳頂供献土器出土状況（東より）	47
図版12	柴尾2号墳周溝内遺物出土状況（北西より）	47
図版13	柴尾2号墳周溝内遺物（第図）出土状況	48
図版14	柴尾2号墳周溝内遺物（第図）出土状況	48
図版15	柴尾2号墳周溝内遺物（第図）出土状況	49
図版16	柴尾2号墳周溝内遺物（第図）出土状況	49
図版17	1号主体部完掘状況（東より）	50
図版18	1号主体部鉄族出土状況（西より）	50
図版19	墳頂祭祀遺構検出状況（2号主体部直上）	51
図版20	2号主体部2段掘り土壙検出状況	51
図版21	2号主体部セクション	52
図版22	1号主体部（手前）と2号主体部（奥）	52
図版23	3号主体部完掘状況（東より）	53
図版24	3号主体部完掘状況（南より）	53

図版25	石器検出作業風景	54
図版26	石器（第25図1）出土状況	54
図版27	尾根上平坦面地山検出状況（手前が2区）	55
図版28	1区完掘状況	55
図版29	4区半壌組み合せ箱形石棺検出状況	56
図版30	柴尾3号墳周溝検出状況	56
図版31	柴遺跡トレント1発掘前近景	57
図版32	柴遺跡トレント1完掘	57
図版33	柴遺跡トレント2発掘前近景	58
図版34	柴遺跡トレント2完掘	58
図版35	柴遺跡トレント3発掘前近景	59
図版36	柴遺跡トレント3完掘	59
図版37	柴尾2号墳墳頂供獻土器	60
図版38	柴尾2号墳周溝内出土土器	60
図版39	柴尾2号墳周溝内出土土器	61
図版40	柴尾2号墳1号主体部出土鉄鎌	61
図版41	柴尾遺跡出土石礫	62
図版42	柴尾遺跡川大型スクレイパー	63
図版43	柴尾遺跡出土スクレイパー	64
図版44	柴尾遺跡出土石器未製品・剝片	65

文化財愛護シンボルマークとは……

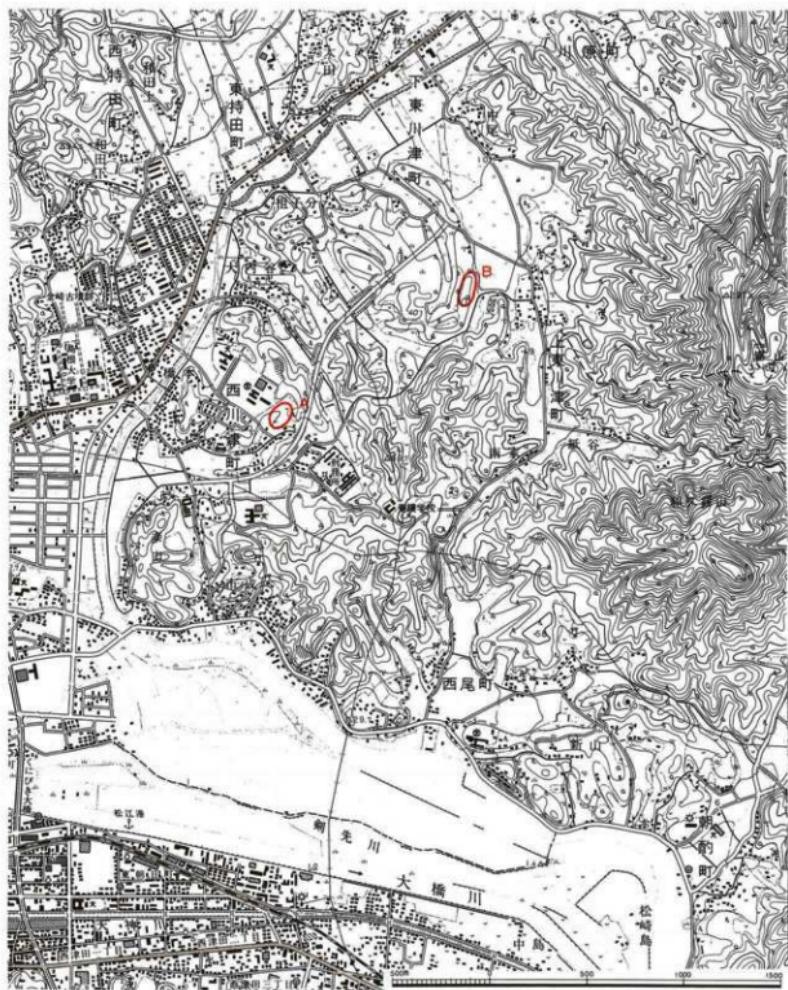
このマークは昭和41年5月26日に文化財保護委員会（現文化庁）が全国に公募し、決定した文化財愛護の運動を推進するためのシンボルマークです。

その意味するところは、左右にひろげた両手の掌が、日本建築の重要な要素である斗拱^{トコウ}、すなわち斗と拱の組み合わせによって全体で軒を支える腕木の役をなす組物のイメージを表わし、これを三つ重ねることにより、文化財というみんなの遺産を過去・現在・未来にわたり永遠に伝承していくこうというものです。



文化財愛護
シンボルマーク

I. 位置と環境



(A : 柴遺跡 B : 柴尾遺跡)

第1図 柴遺跡・柴尾遺跡の位置

柴尾遺跡は、島根県松江市上東川津町松本1252に所在する。

松江市は東西に長い島根県の東寄りに位置しており、古代出雲の国の国庁が設置されて以来今日に至るまで周辺地域の中心として発展してきた。現在では島根県の県庁所在地でもある。

柴尾遺跡が位置する上東川津町は、JR松江駅から直線距離にして約4km北東で、朝酌川が流れる川津・持田平野に張り出した丘陵と丘陵の谷あいのかなり奥深い場所に位置している。

朝酌川流域の沖積平野は遺跡が多い場所で、古墳時代に先行する縄文時代、弥生時代の遺跡也非常に多い。特に大規模遺跡であるタテチョウ遺跡や西川津遺跡は有名で、大量の木製農耕具等が出土しており、古くからこの地に農業が定着していたことが知られている。このような地盤であるから古墳時代に入ってもその生産力はさらに向上・進歩して、引き続き在地豪族の勢力基盤になっていったと推察されるのである。ところが、古墳時代中期にはいると金崎1号墳や大原1号墳、後期では薄井原古墳などの勢力を誇示する古墳が築かれているのに対し、周辺で前期古墳を探してみても祖子分長池古墳や中尾古墳群といった小規模古墳しか現在のところ確認されていない。今回、割竹形木棺を主体部にもつ柴尾2号墳を確認したが、もっと重要なポジションを占める前期古墳がどこかに埋もれてい可能性は高い。

さて、柴尾遺跡のごく周辺を見渡してみると、谷の奥まった上東川津町は「出雲國風土記」にも記載された布自伎美社が鎮座する嵩山の人山口にあたる。縄文・弥生期に石鎚を用いて鹿や猪の狩をするのに嵩山や隣の和久羅山は良い狩猟場になっていたことであろう。また、古墳時代では柴尾古墳群の他、西宗寺古墳など後期の古墳が点々と位置している。上東川津町付近は、古代において鷲根郡山口郷郷庁が設置された場所に推定されている場所であるから、古墳時代後期の遺跡が点在するのはごく自然な事であろう。また、奈良時代の嵩山頂上は烽が設置された重要な場所でもある。この地はいまも静かな生活の場になっているが、はるか古代より人間の足音が絶えなかった場所のようである。

柴遺跡は松江市西川津町2962に所在する。

柴尾遺跡と同じく朝酌川流域に張り出す低丘陵の緩傾斜地に位置している。現在は陽当たりのよい畑地になっている。柴尾遺跡からみると直線距離にして1.1km南西に離れた場所である。この柴遺跡の周辺には、かつて調査された山崎古墳、柴古墳群、馬込古墳群のはか堤防遺跡が知られており、少し離れてはいるがタテチョウ遺跡にも近く、遺跡密集地の一角と言っても過言ではない。

II. 調査に至る経緯

平成2年度において有限会社豊和不動産が「東学園台開発工事」として住宅団地を計画した際、松江市教育委員会は平成2年7月4日付けで遺跡分布調査の依頼を受けてこれを実施した。その結果、方墳5基のほか、住居跡等が推定される良好な平坦面、緩斜面が確認され大規模な発掘調査が必要との回答をだした。その後この話はたち消えになっていた。

ところが、平成4年度、再び有限会社豊和不動産が先回の「東学園台開発工事」でひっかかった古墳密集地などを外した場所に(仮称)「ニュー学園台住宅団地造成工事」を計画し、平成4年6月11日付けで松江市教育委員会に遺跡分布調査の依頼があった。同年6月16日これを実施した結果、1カ所で土師質土器の細片を数片表探したほか、なだらかな緩斜面を坪掘りした結果、周囲の畠が赤土であるのに対し黒色土層が観察され、住居跡が存在する可能性が推定された。よって、柴遺跡と呼称される以上の2カ所について試掘調査を実施する事になった。

また、有限会社豊和不動産は(仮称)「あじさい団地造成工事」も計画しており、前記した開発行為とは全く別の事業であるけれども、前記の開発に伴って撤出される残土を後後に搬入する予定にしており、両者は同時進行する一連の行為ということのようである。したがって、松江市教育委員会は同年6月17日、(仮称)「あじさい団地造成工事」予定地内について遺跡分布調査を実施した。その結果、マウンド3基と良好な尾根上平坦面が確認され、マウンドについては現状保存が望ましく、尾根上平坦面については試掘調査が必要、またその他区域は樹木繁茂のため視界が悪く、後日伐開後再度分布調査が必要であるとの回答を出した。

しかし、マウンドが位置する丘陵は周辺より小高い場所になっており、これを現状保存という事にすると用地として削平するレベルよりもはるかに高くなるために支障が生じてくるとのことで、この丘陵尾根上全体について発掘調査を実施して記録保存を実施する事となった。

柴尾遺跡

III. 調査の概要

(柴遺跡を含む)

柴遺跡は、平成5年5月31日から6月21日の間の5日間、松江市教育委員会が試掘調査を実施した。遺物を表採した低丘陵の3カ所にトレンチを設定して地山まで掘り下げた。その結果、須恵器破片が少々出土したがなんら遺構は検出できなかった。したがって、柴遺跡に関してはトレンチ調査のみで終了した。

5月31日より柴尾遺跡の調査に入った。まず杭打ちをしてグリッドを設定し、平板測量による地形測量を実施した。6月16日より古墳間の平坦面に設定したグリッドの掘削を開始した。遺構の有無を調べるためにグリッドを千鳥状に掘って様子を見た。その結果として土器片少々が出土し、溝状遺構と土壌状遺構が検出された。以上の調査は6月26日まで松江市教育委員会が実施した内容である。

7月1日からは、機構改革により(財)松江市教育文化振興事業団が引き続いて調査を実施することになった。

立木を伐採して設定された柴尾遺跡の調査範囲内には、3カ所のマウンドと幅約20m、長さ約50mの平坦面があり、3基の古墳と平坦面では住居跡の存在が推定された。それぞれのマウンドは、残丘を一見したところ、1号墳は方墳とわからやすかったが、他の2基は円墳のように見えた。

最初に1号墳から調査を開始した。グリッド設定の際打たれた杭に沿ってトレンチを掘り、本当に古墳であるか否かを確認した。その結果は盛り土状の十層堆積が確認され、地形の高くなる側では周溝も確認された。まちがいなく古墳であることが確認されたので、土層観察用の畦を十文字に残して残丘上の堆積土(表土)を除去していく。残丘を検出した時点で1号墳は明確に方墳と確認された。ところが、畦のセクションからも平面的な精査からも主体部を見つけることができなかった。主体部はすでにとばされたものと判断した。最後に盛り土の除去をおこない、旧表土をさらに掘り下げた。その結果、旧表土の下から土器類の小片が出土したが、旧表土下の出土であったため、古墳には直接関係がないものと判断された。以上で1号墳に関する調査を終了した。

次に、当初2号墳と呼称していたマウンドにトレンチを設定した。ところが、現表土のすぐ下はかたい赤土の地盤になってしまっており、古墳ではないことが判明した。

次に、当初3号墳と呼称していたマウンドに、あらかじめ設定されていた杭ラインに沿ってトレンチを掘った。その結果、盛り土と周溝の層が明確に検出され古墳であることが判明した。したがってこれを改めて2号墳と呼称することにした。土層を観察するための畦を十文字に残し、残丘上と周溝内の堆積土の除去をおこなった。そうしたところ、比較的鋭角で深く掘り下げられた、平面的に見ると直角に折れる周溝が検出され、方墳であることがわかった。周溝内にはたくさんの遺物が転落?して出土しており、これらを図面にとって取り上げた。当初円墳と考えて杭を打っていたため、土層

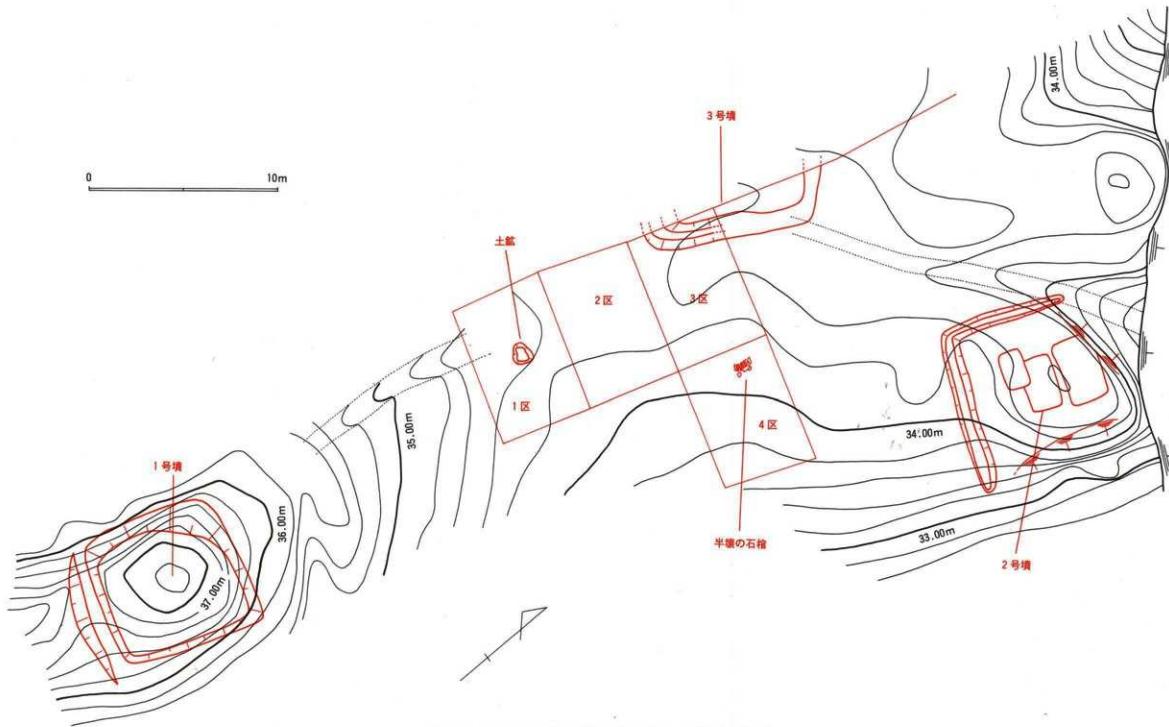
観察のためのトレンチの位置が墳丘の辺に平行しておらず、主体部の土層観察が困難であったが、盛り土層を切る主体部層が確認できた。主体部を平面的に検出するため土層観察用の柱をトレンチと平行に残して精査をおこなった。その結果、墳丘中央部よりやや東寄りの位置から古式土師器が出士した。これを図面にとって取り上げ、さらに精査しながら掘り下げていった。古墳中央よりやや東寄りの浅い位地からは石甌い様の遺構が検出された。石甌いのすき間や埋土中には古式土師器の薄手の甌の破片が散乱していた。盛り土のあまりにも浅いレベルから出土したため主体部とは考えにくい。むしろ墳頂祭祀遺構と考えた方が妥当のようである。トレンチの土層を観察したところ、この遺構のさらに下に土層の亂れが確認できたため上層のこの遺構の平面、断面図をとり、さらに掘り下げて精査した。

その結果、平面プラン角丸方形の主体部が3カ所から検出された。うち2主体部は切り合い関係にあった。新しいと思われる主体部から順番に縦・横の畔を残して掘り、セクションを観察した。セクション図をとった後、畔を取り払い、主体部全容を検出した。その後、盛り土全てを除去して2号墳に関する調査を終了した。

さて、1号墳と2号墳の間の平組面について、グリッド内にサブトレンチを設けてさらに深掘りをおこなった。先回の調査では古墳時代の遺構面までしか下げられていなかったが、地川に酷似したかたい赤上層を除去すると黒斑灰色粘質土層があらわれ、その下にかたい赤土の地山があった。黒斑灰色粘質土中には黒曜石の剝片が含まれていた。1つのグリッドについて全面、古墳時代の遺構面をとばして地山まで掘り下げた。その結果、黒曜石製の鎌やスクレイバーの製品のはか、たくさんの剝片が出土した。土器が出土していないので正確な時期は不明であるが、縄文期の石器生産遺跡の存在を考えられ、時間の許す限りグリッドを掘り下げることにした。しかし、極小な押圧剝離面まで見逃さずに平板に位置とレベルを落とそうとすると、きわめて慎重な作業が必要とされ、また雨天になるとぬかるむ足元では全く調査ができず、雨天の多い今年の異常気象もとに調査は遅々として進まなかつた。

最北のグリッドからは古式土師器をたくさん含んだ溝状遺構が検出された。その溝状遺構をおってさらに北側のグリッドを掘り下げるに溝状プランが統いており、観察でき得る限りでは、方墳の崩壊の一因のようであった。出土土師器から推察すると、マウンドは削平されているようであるが、2号墳とほぼ同時期の古墳が存在するのではないかと思われる。かりにこれを3号墳としておく。3号墳の周溝は立木の伐採がされていない調査範囲外に向かって延びており、主体部があると推定される場所は廃山上と積まれた場所の下にあたっていた。これを調査しようすると立木の伐採からはじめて、廃土の除去といへんな時間がかかりそうであった。細かい石器生産遺跡検出作業も含めると、とても後続に予定された今年度中の調査ができそうにないため、今年度の柴尾遺跡に関する調査は1・2号墳の調査を終了する事と、4つのグリッドについて石器生産遺跡の調査を終了することにとどめ、平成5年10月1日、調査を一旦終了した。

この遺跡に関する調査は、引き続き平成6年度事業として実施する予定である。



第2図 柴尾遺跡発掘調査前地形測量図および調査成果図

IV. 柴尾1号墳

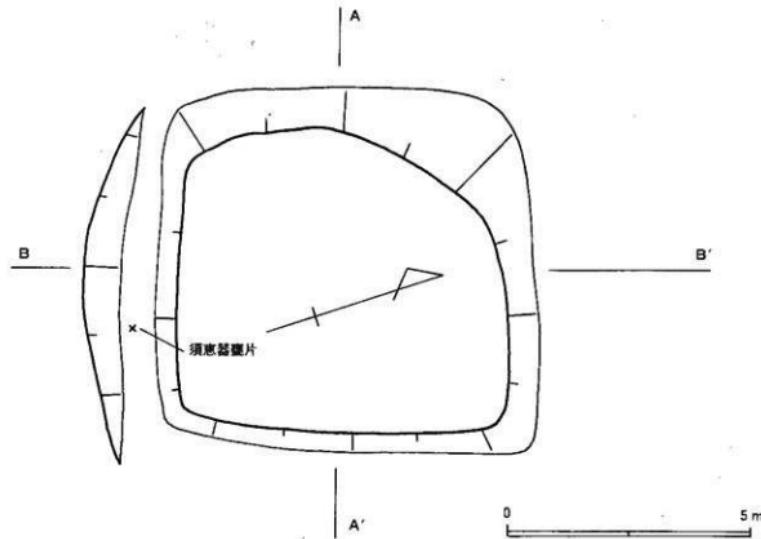
・遺構

北側の平坦面から見ると、標高約36m付近の小高いところに築造されているため、一見したところでは比較的の残存状況が良いように思われた。ところが、十文字に土層観察用のトレンチを掘ったところ、整然とした盛り土は確認されたが、表土層が厚く、盛り土は一番残りが良いところで、旧表土を含めて地山上60cm程度であった(第5図)。葺石・埴輪はなかった。

墳丘の築造方法は、後期古墳の典型的なタイプで、緩斜面の立地を利用して南の地形的に高い側に溝を切り、東西側は地山をカットして方形墳を形作っている。旧表土は除去せずにそのまま盛り土をしている。墳丘の規模は1辺約8mで、南側に切った溝は幅1m強、長さ7m強を測る(第3図)。

トレンチはほぼ墳央をとおっていたが、主体部はトレンチ上層からは観察できず、どこか片寄った場所に位置している可能性も考えられたため、平面的な精査による検出作業に入った。ところが旧表土上の盛り土は30cm程度しか残っていないため、主体部を探そうと精査を重ねているうち、すぐに旧表土面に達してしまった。小高い場所に位置しているがために、盛り土の流出、風化が著しく、主体部もすでに流出してしまったと思われる。

最後に盛り土および旧表土の除去をおこなった。そうしたところ、ほぼ墳央の旧表土直下から杯

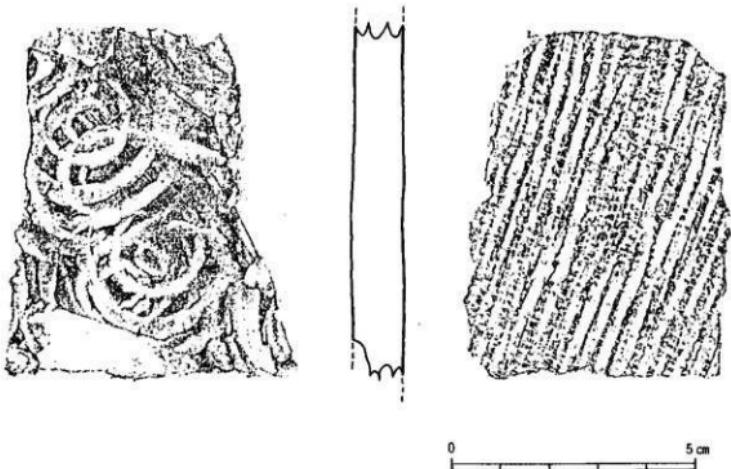


第3図 柴尾1号墳検出状況

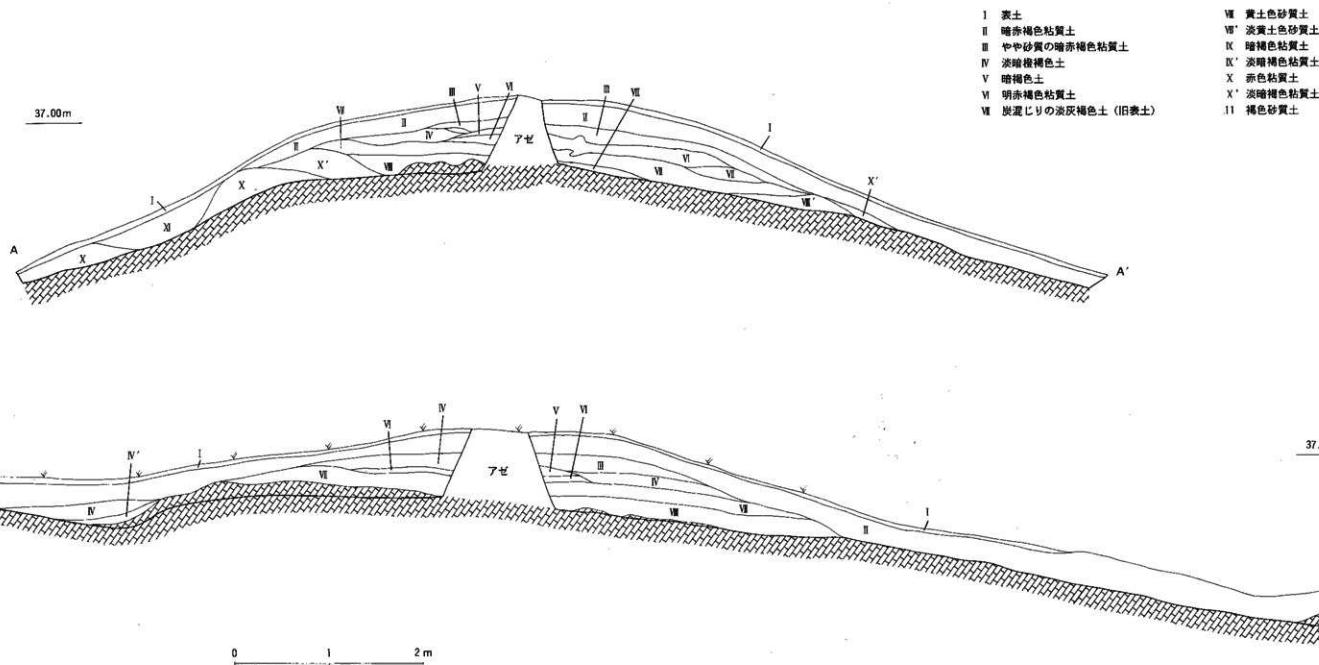
たは高杯の一部と思われる土師器片が出土した。出土当時は器形がはっきりわかつたけれども、風化がいちじるしく、取り上げの際に細片化してしまって図上復原もする事ができなかった。この土器は出土レベルが旧表土の下である事から、この古墳とは直接関係はないものと判断している。付近には1号墳築造以前の遺跡が埋もれている可能性が高い。

・遺物

出土遺物は、周溝内から甕の小片1片（第4図）のみが出土した。 $5 \times 7\text{ cm}$ の小さな破片であるが、厚みが1cmあり、大甕の破片であると思われる。外面は平行文タタキ、内面は同心円文タタキで調整されている。地山直上の出土であったため、3号墳築造時、もしくは築造されて間のないうちからこの場所に位置していたものと察せられる。したがって、ほんの小さな須恵器片ではあるけれども、柴尾1号墳は、後述する柴尾2号墳とは時を隔てた後期古墳であると判断された。



第4図 柴尾1号墳周溝内出土遺物実測図



第5図 柴尾1号墳セクション図

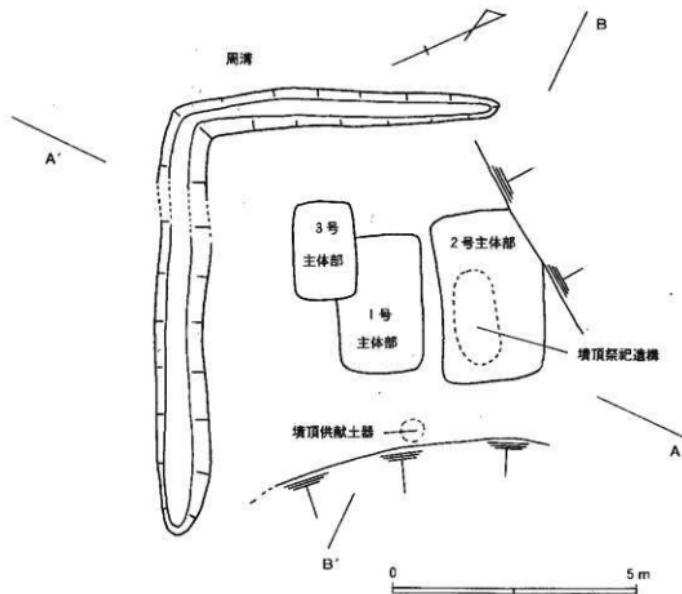
V. 柴尾 2 号墳

・遺構

(墳丘)

発掘する前は円墳のような形状を呈していたが、実際に掘ってみるとそれは後世の削平によるためで、復原すると $8\text{m} \times 8\text{m}$ の方墳であった。地形的に高くなっている南辺と西辺の外側に幅約 1m 弱の周溝が直角に掘られていた。当初円墳と想定して杭打ちをしていたため、土層観察のためにあけたトレーナーが方墳の辺に平行していなかったのが残念である。

墳丘は旧表土をきれいに除去した後、周辺の土を盛り、周溝部分は地山をさらに 20cm ばかり掘り下げて作っている。周溝の幅は比較的狭く、特に角から南辺にかけては深めに掘りこんでいる。丁寧なつくりである。周溝内からは多くの土器が出土した(第9図)。具体的には複合口縁の壺 3、単純口縁の壺 1、複合口縁の壺 1、高杯 2 である。出土レベルは微妙に違っており、周溝最下部から出土したのは、第16図-1、2、3、やや浮いたレベルで出土したのは第17図の 1、3、4 である。2 者の間には時間的隔たりがあると思われる。

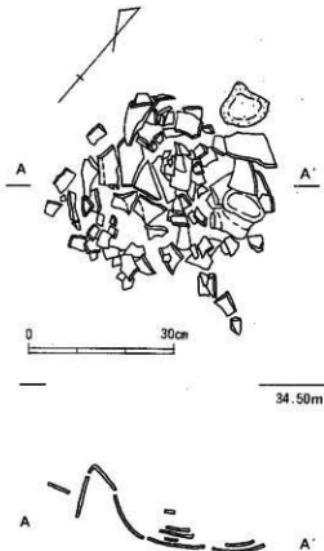


第6図 柴尾 2号墳検出状況

残丘高は、表土を除けば一番高いところで60cmばかりであった(第8図)。前期古墳特有の墳頂供献土器が比較的浅いレベル、絶対高で34.20m地点に良好な状態で出土した事から(第7図)、墳丘高は現在も築造当時と大きく変わっていないのではないかと推察された。墳頂供献土器は複合口縁の壺1と単純口縁の壺1の2個体であるが、どちらも特徴的な個体であった。平面的には墳央から約4.5m南東の位置から出土してた。

さて、トレンチで上層を観察すると、水平な層を切るようにして主体部埋土が観察された。トレンチが墳丘の辺に平行していないため、主体部埋土を明確に判断する事は困難であったため、平面的精査で主体部の位置を明確にする事にした。まず最初に墳央よりやや北寄りから石囲い様の遺構を検出した。掘り方は2.0m×1.1mの楕円形である。観察できる範囲では、深さは0.2m程度で、土として西側半分に石が集中していた。墳丘の東側では大小取り混ぜてたくさんの石が散乱しており、後世の造作によってもともとこの遺構内にあったものが移動させられた可能性も考えられる。ちなみに墳丘東側の石の散乱は、当初、経塚ではないかと考えていたが、トレンチをいたるところ上層に乱れはなく、地下遺構も確認されず表面的なものと判明した。石囲い遺構は、標高34.30mとレベルが供献土器とほぼ等しく、埋土が黒色土1色であったためとても主体部とは思えない。この遺構内には古式土師器の細片が多量に混じっており、何らかの意識された造作、おそらくは墳頂祭祀に関係する遺構ではないかと思われる。細片となって混じっていた土師器の壺片は風化のため図上復原も不可能であった。

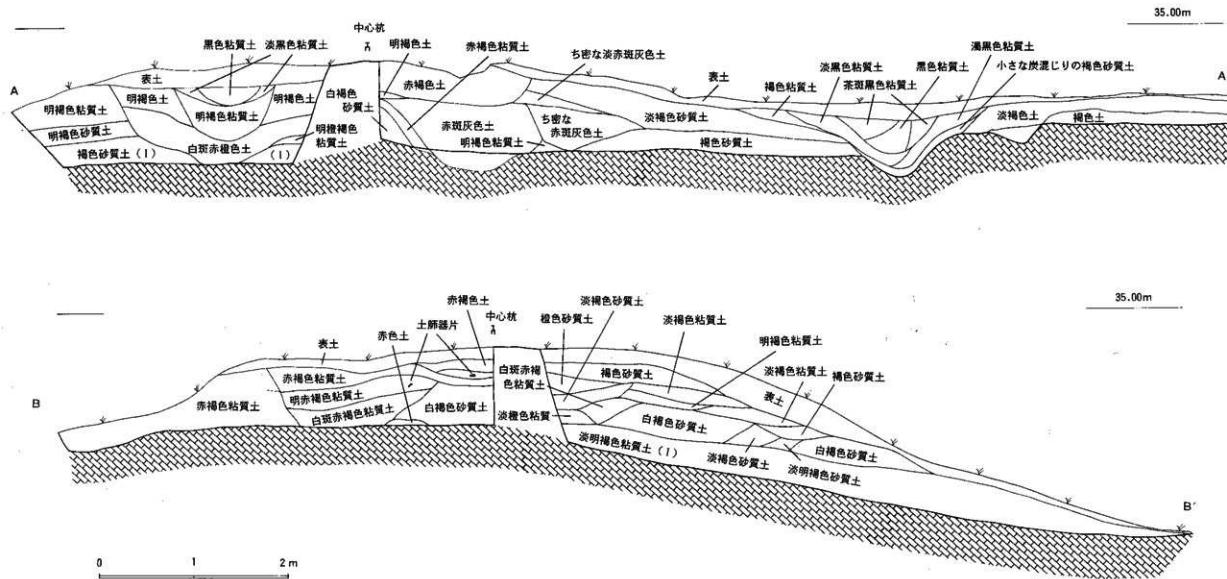
さらに下部を調査するために石囲い遺構をとばして精査を重ねた結果、主体部を3ヵ所確認した。



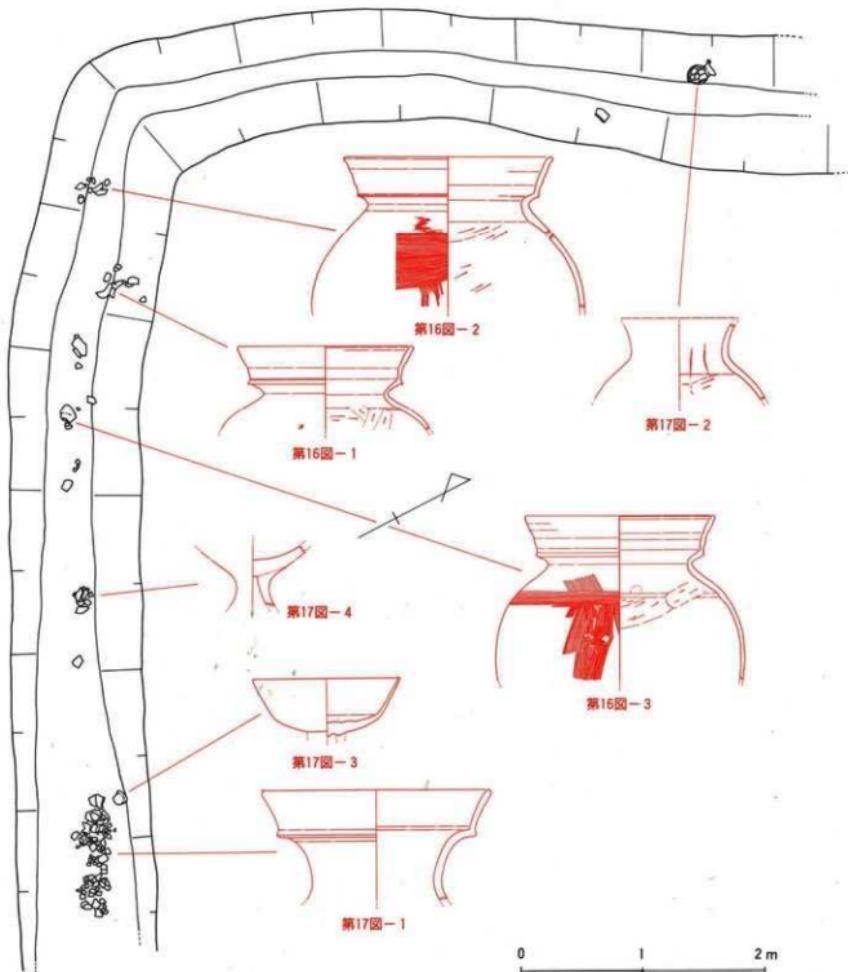
掘り方の平面プランはいずれも角丸方形であった。便宣上、仮にこの柴尾2号墳が正方形と考えた場合、ちょうど墳央に位置して1番最初に掘られたと思われるものを1号主体部、少し北に平行に位置する大きめのものを2号主体部、1号墳とは切り合い関係にある南東に平行して位置するものを3号主体部と以下呼称する。

主体部の新旧関係については、墳央にあることから1号主体部が最初であろうと思われる。2番目は層位関係からの観察はできなかったが、1号主体部とは少し離れて並行して位置しており、内部構造が1号主体部に近似している事から2号主体部と考えられる。3号主体部は、1号主体部と切り合い関係にあり、時間的隔たりが感じられる。また、内部構造も1、2号主体部とは全く違っていたため、最後に掘られたものであろう。

第7図 墳頂供献土器出土状況



第8図 柴尾2号墳墳丘セクション図



第9図 周溝内遺物出土状況

(主体部)

・ 1号主体部

主軸は東西の辺に平行している。掘り方の平面プランは $2.7m \times 1.4m$ を測り、絶対高34.1mの高さから掘りこんでいる。33.70mまではほぼ垂直に方形に掘り、さらに木棺を安定して据えるため、そこから $2.4m \times 0.6m$ を楕円形に深く掘りこんでいる。いわゆる2段掘りである。2段掘りの最下部の床は断面が弧を描いており、短い割竹形木棺を納めていたようである。

副葬品は鉄鎌1のみであった。最下部の地山直上から出土しており、先端は東方向を向いていた。なお、鉄鎌の下部には木質が鈎着しており木棺の存在を裏付けている。時期判定できる遺物が出土せず、埋葬時期については不明である。

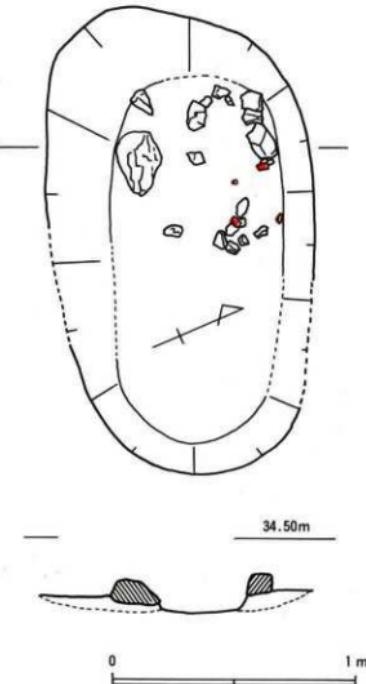
・ 2号主体部

主軸は東西の辺に平行している。1号主体部から約0.7~0.8m離れて平行に位置している。掘り方の平面プランは $3.5m \times 2.1m$ の角丸方形で、1号主体部よりやや大型である。作りは1号主体部と近似しており、絶対高33.90mまで垂直に掘りこみ、さらに木棺を安定して据えるため、そこから $2.9 \times 0.7m$ を楕円形に深く掘りこんでいる。2段掘りである。2段目下部の床の断面は弧を描いており、短い割竹形木棺を納めていたようである。

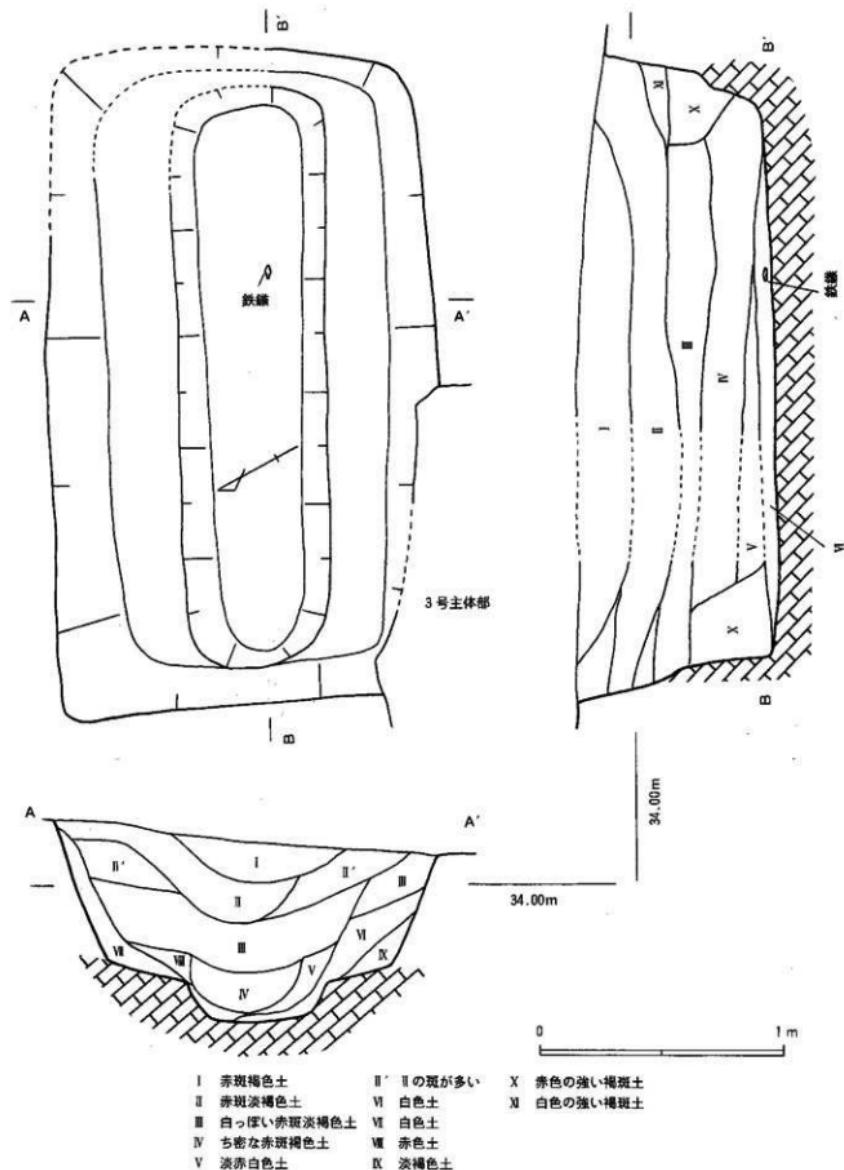
副葬品は出土しなかったが、遺構埋土中の特に断面のⅡ層中には古式土師器の碎片が無数に混入していた。碎片の大きさが一定している事から故意に混入させた可能性がある。埋葬時期については不明である。

・ 3号主体部

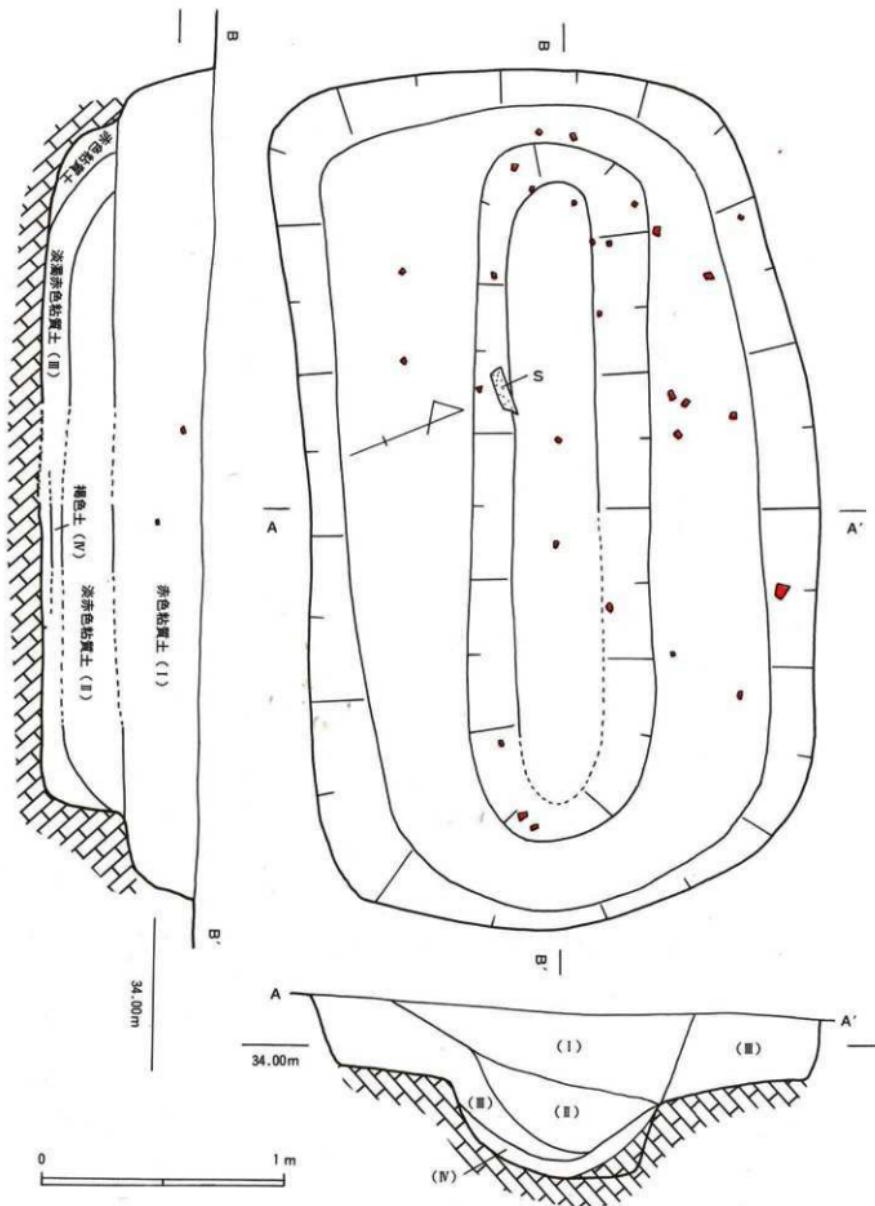
主軸は東西の辺に平行している。1号主体部とは切り合い関係にあり、1号主体部のやや南東に位置し、1号主体部を切っている。掘り方の平面プランは $2.1m \times 1.1m$ の角丸方形で、やや小型である。内部構造は、絶対高33.90mまで垂直に掘り、そのレベルからさらに $1.8m \times 0.4m$ の方形を約10cmの深さまで地山面から掘りこんでいる。2段掘りである。2段掘りの上面には白色粘土が細状にめぐらされている。遺構の状況から考えて、組み合せ箱式木棺を安定させる役目をはたしていたと思われる。粘土の状況を観察すると、2つの角では粘土の内側が直角に検出され、木棺の角の形状を推察するこ



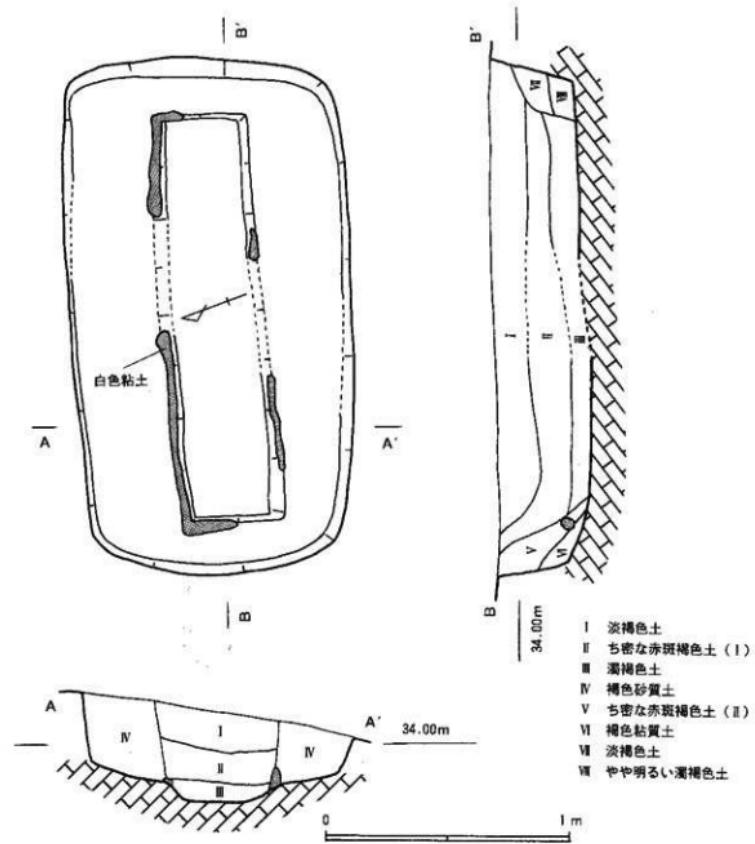
第10図 墳頂祭祀遺構平面図・セクション図



第11図 柴尾2号墳1号主体部平面図・セクション図



第12図 柴尾2号墳2号主体部平面図・セクション図



第13図 柴尾2号墳3号主体部平面図・セクション図

とができた。前記のとおりこの3号主体部は、1、2号主体部とは全く違う、底の平らな箱形木棺を納めていた。

副葬品は出土しなかった。埋葬時期については不明である。

・遺物

(主体部内出土遺物)

1号主体部から鉄鎌1点が出土した(第14図)。完存で出土したが、発掘中に基部を少々欠損してしまった。残存長は5.6cm、刃部最大幅は1.6cmを測る。茎の欠損部分はせいぜい0.5~1cm程度である。形状は柳葉形を呈する。

(墳頂出土遺物)

2個体の古式土師器が出土した(第15図)。前記したとおり墳尖から約4.5m南の地点から出土した。破片の数は比較的たくさんあったのだが、接合面が風化しており、復原は困難であった。第15図-1は単純口縁の甕で、図示した部分の約1/2が残存している。図上復原すると口径は17cm、頸径は13.6cmを測る。胴部外面は風化しているが一部ハケメが残り、内面はケズリ調整による。口縁部は外・内面ともヨコナデ調整で、口縁部は内溝し、口唇部はやや肥厚して内側に向かってとびだしている。

2は複合口縁を持つ頸部に突帯を張り付けた壺である。頸部から上の口縁部は全て欠損している。頸径は図上復原して約12cmを測る。底部も残っているが接合はできなかった。底の形状は丸みを帯びた小さな平底である。外面は風化が進んでいるが、胴部はハケメ調整が残っている。細かく見ると縦へ斜め方向のハケメで調整をした後、最後に肩部へ丁寧な仕上げハケを一周めぐらせて仕上げている。内面はケズリ調整による。頸部付近は内外面ともヨコナデ調整を施している。

さて、1も2も島根県内ではあまり出土しないタイプの土器であった。1は口唇が肥厚するという、いわゆる布留式甕である。2は鳥取県東部で盛行する頸部に突帯を張り付ける壺で、島根県内では今のところ三刀屋町の松本1号墳、鹿島町の草田遺跡川土の2例しか報告されていない。前記したとおり、1はいわゆる布留式甕であるが、鳥取県東部に定着して発展したタイプで、1も2も鳥取県東部の影響を強く受けた、もしくは鳥取県東部から持ち込まれた土器ではないかと思われる。被葬者が鳥取県東部地城と密接な関係にあった事がいま見られるようで興味深い史料である。

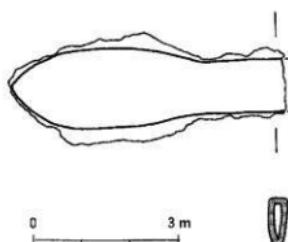
ただ、これらの土器が1~3のどの主体部と結びついているかについては全くわからない。

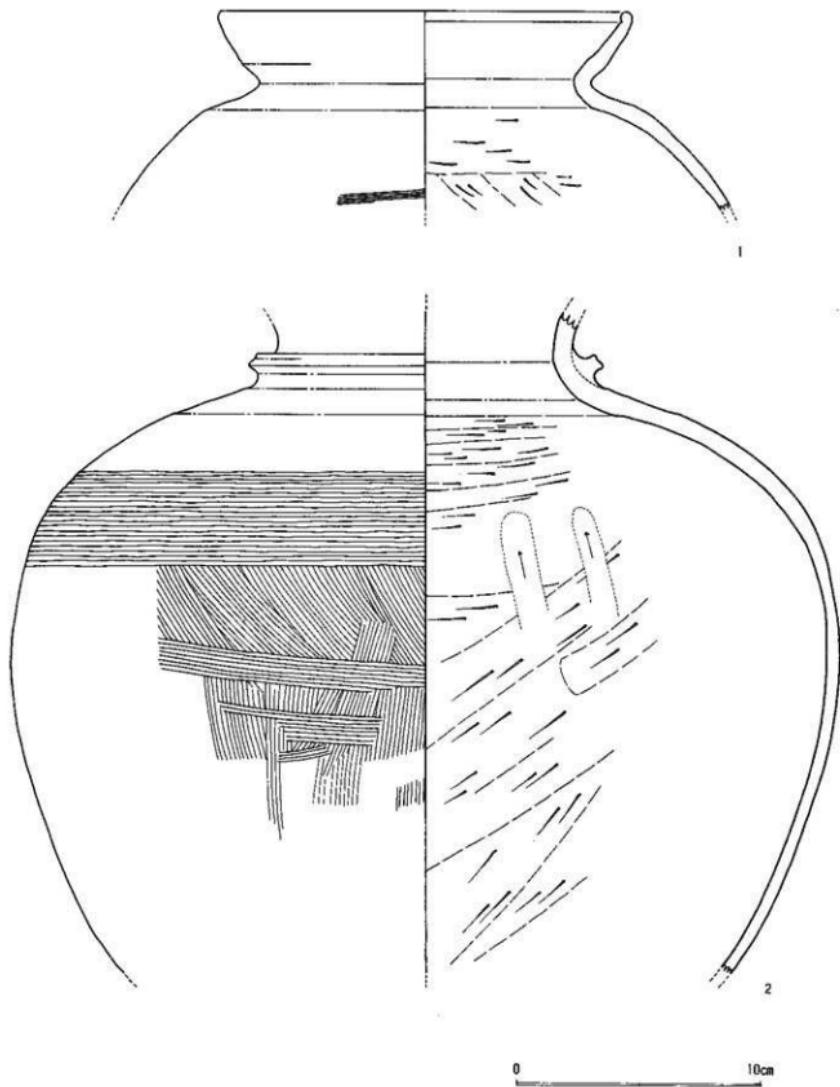
(周溝内出土遺物)

周溝内からは、墳丘のところで記したとおり、多数の土器が出土した。しかし、いずれも風化の程度がひどく、取り上げができるのは出土した土器の半分以下であった。第16図-1、2、3、第17図-2は周溝最下部から出土したもので、初葬の際の供獻遺物と考えられる。また、17図-1、3、4は最下部よりやや浮いた位置から出土しており、追葬の際の供獻遺物と考えられる。

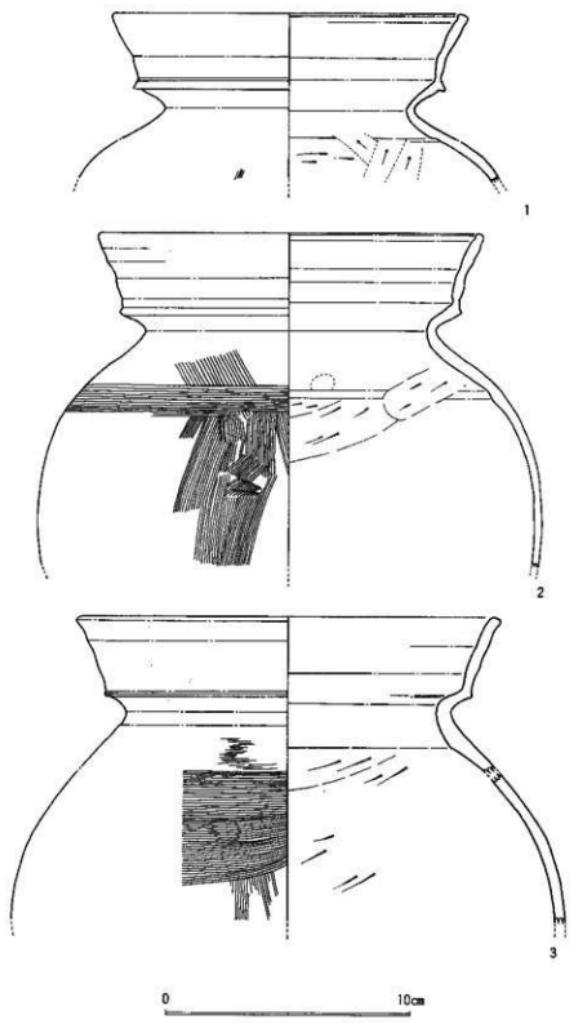
次は個別に説明を加えていきたい。第16図1は図示部分の約1/4周程度が残っており、それから復原して図面化した。口径は14.6cm、頸径は10.2cmを測る。器壁は

第14図 1号主体部出土鉄鎌実測図



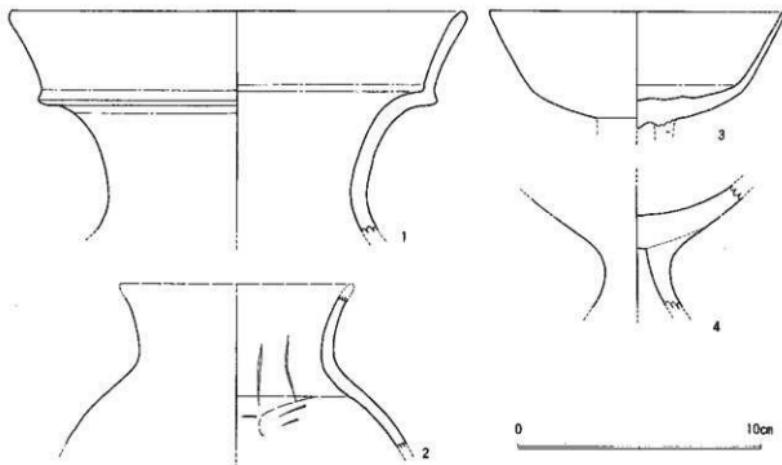


第15図 墓頂出土遺物実測図



第16図 周溝内出土遺物実測図（1）

非常に薄く、もともと焼成は良かったと思われる。調整は、頸から口縁にかけてはヨコナデ、胴部外面は風化しているが一部縦ハケが残る。内面はケズリによる。口縁外面にはススが付着している。2、3も基本的には1とほとんど同じ調整による作りである。ただ、2、3は器壁外面の縦ハケ後、肩部に仕上げハケを1周めぐらしている。いずれも1と同様口縁や胴部外面にススの付着がみられる。法



第17図 周溝内出土遺物実測図（2）

量は、2が口径15.8cm、頸径11.9cm、3は口径17.4cm、頸径13.3cmを測る。

第17図-1は複合口縁の壺で、頸部突帯こそはないが、第15図-2の壺とほぼ同じタイプのものである。出土状況から1個体分が潰れていたようであるが、風化が著しく、ほとんど取り上げることができなかつた。取り上げたわずかな個体もほとんど接合不可能で、口縁部分だけ図上復原して図面化できた。風化のため調整は一切不明で、表面剥離が全面に及び、図化した断面図の厚さは本来の厚さよりかなり薄くなっている。2は単純口縁の壺で、胴部は落ち込んでいたが完形で出土した。口縁はやや外にひらいている。これも風化が著しく口縁付近しか復原できなかつた。器壁は全体に風化が著しく、口縁外面はヨコナデ、胴部内面はケズリ、頸部内面はタテナデ後ヘラの背を押し当てている。3は高壺の杯部分である。全体の1/3程度が残存している。口径は復原すると12.2cmを測る。これも風化が著しく、調整は一切不明である。また、表面剥離も著しく、もともとは図面化した断面の2倍は器壁厚があった。脚部は最初から残存していなかつた。4は高壺の杯底部と脚の接合部である。出土した時点は口唇が内溝する杯口縁部がほとんど残っていたが、取り上げられなかつた。色調は赤色で脚の一部にミガキの痕跡がみられる。

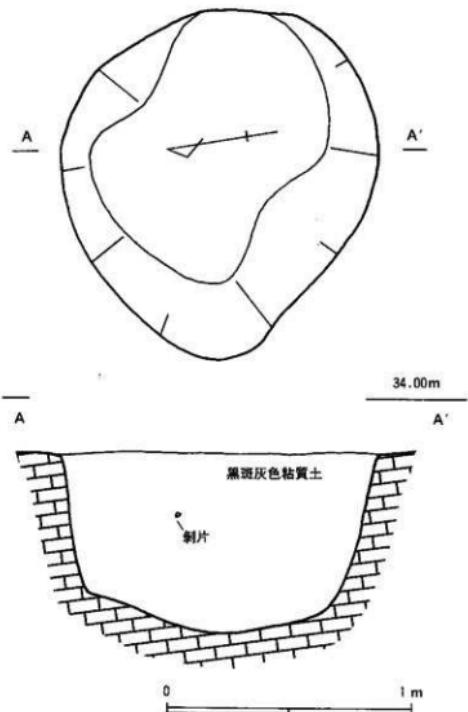
VI. その他の遺構

前記した古墳2基の他に、1号墳と2号墳の間の平坦面も一部調査した。第2図で示したグリッド、1、2、3、4区である。この平坦面は、表土下すぐには地山に酷似した堅くしまった赤橙色粘質土があらわれ、当初それを地山と見ていたが、やや潤りが感じられ、サブトレンチを設定して一部深掘りをしたところ、その下からさらに炭混じりの黒斑灰色粘質土があらわれ、その土層中からは黒鐵石製の石器、石器を作る際に出た剝片が出土した。このトレンチを面向て広げたところ、全面的に黒斑灰色粘質土が広がっており、この平坦面全体に石器生産遺跡が埋もれている可能性もでてきた。そこでグリッドごとに順次地山まで下げていくことにした。

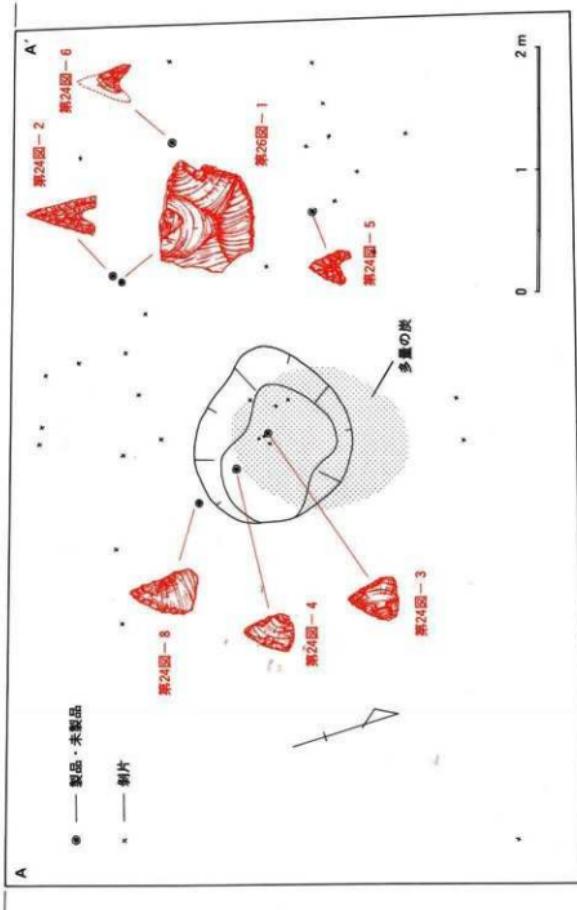
・1区（第19図）

かなり上の層からも剝片が出土したため慎重に掘り下げていった。押圧剝離片も見逃さないように目を皿にする作業を続けた。見のがした剝片も多いとは思うが、それでも石鐵製品3、石鐵木製品1、石鐵欠損品1、スクレイパー製品1のはか、多数の剝片が出土した。4カ所掘ったグリッドの内、最も製品・剝片が多く出土した。この尾根上に石器生産遺跡が広がっているとすれば、その中心部分に最も近い場所ではないかと思われる。このグリッドのほぼ中央部分には炭片が大量に散乱しており、この点も注意しながら地山面まで下げていった。その結果、炭が散乱していた場所の直下の地山面から、平面プラン $1.3 \times 1.4m$ 、深さ $0.75m$ の不整形な土壌（第18図）が検出された。埋土は黒斑灰色粘質土一層で、石鐵製品1も含めて剝片も少からず出土した。

土器類は出土しておらず、遺構面の年代については不明である。丘陵尾根上にもかかわらず、遺構面は表土下 $0.3 \sim 0.6m$ も下がった深いレベルに広がっていた。

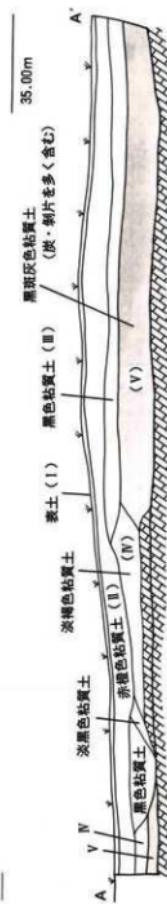


第18図 1区土壤平面図・セクション図



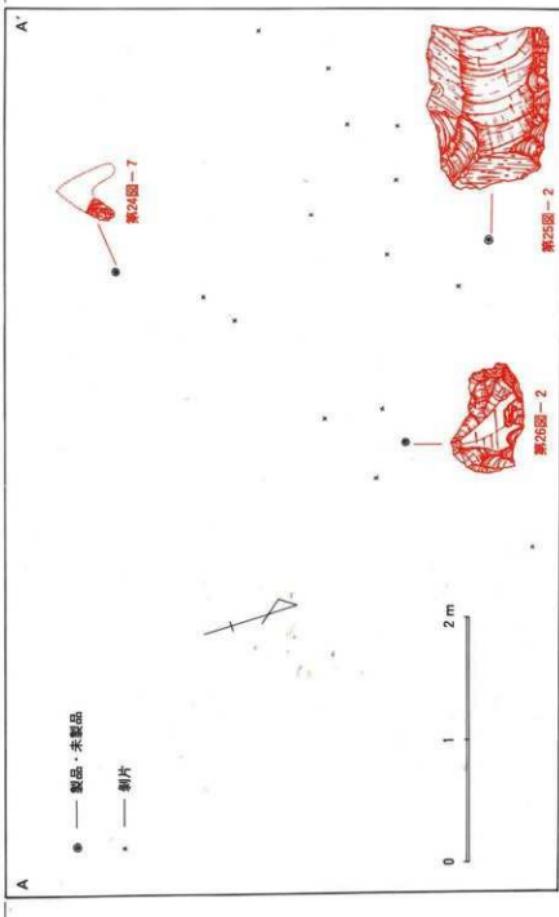
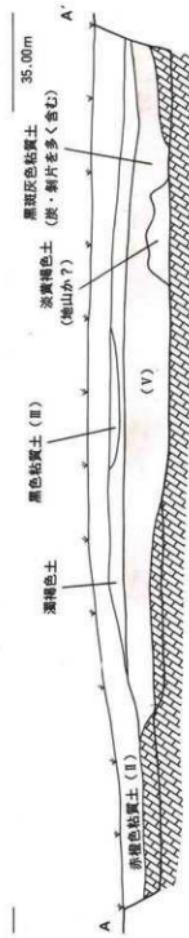
2区（第20図）

層序については1区とはほぼ同じである。地山面まで下げたが、遺構は検出できなかった。遺物は石器欠損品1、スクレイパー2が出土し、他に剝片多数が出土した。遺物の出土密度は1区よりやや低いようである。



第19図 1区平面図・遺物出土状況図・セクション図

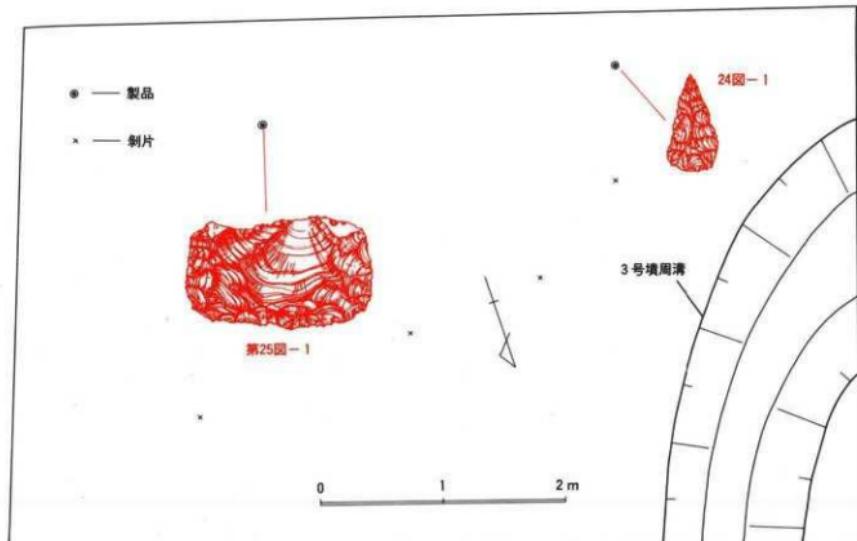
第20図 2区遺物出土状況図・セクション図



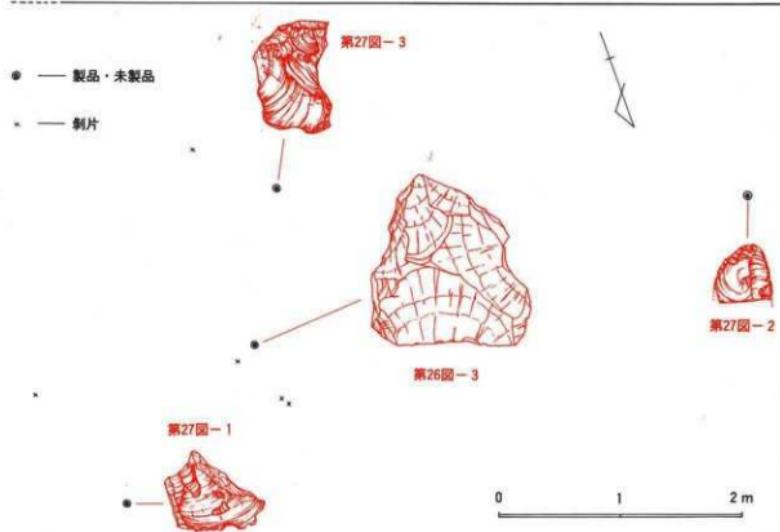
・3区(第21図)

地山面が北にいくほど自然に上がっており、比較的浅いレベルから包含層が出土した。遺物は丁寧な作りの大型スクレイパー1、やや大きめの石鏃1のほか、剝片少々が出土した。1区からみると製品はまんべんなく出土しているが、剝片数は北に行くほど少なくなっているようである。

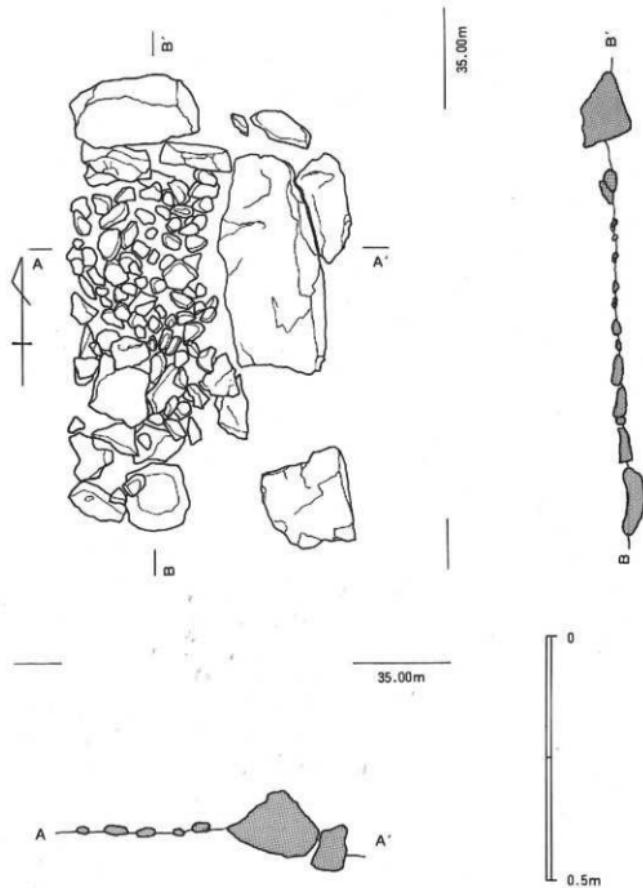
このグリッドの中にはカーブした溝状遺構が走り、その中には古式土器器が多量に落ち込んでいた。北側のグリッド外に溝状遺構の平面プランを追いかけると8mの地点でまた直角に曲がっており、1辺約8mの方墳の周溝であろうと思われる。



第21図 3区遺物出土状況図



第22図 4区遺物出土状況図



第23図 4区出土石棺実測図

・4区（第22図）

3区の東側のグリッドである。表土上にこの辺りには見られない石が露出していたため、表土を除去してみたところ、表土直下から半壊した櫛床を持つ組み合せ箱形石棺が検出された。小口石、側石ともわずかしか残っておらず、全体の規模は不明である。小口石、側石は自然石を利用しており、櫛床は5cm前後の丸石を敷きつめていた。北に残る小口石から約0.5m南の地点で敷石がやや大きくなり、この石棺自体もともと小さなものであった可能性が高い。主軸は南北にとる。

石棺をとばして地山面まで下げると、スクレイパーや剝片など石器生産関係の遺物が出土した。

・遺物

丘陵尾根上に設定した4つのグリッド内からは多くの石器が出土した。出土地点については、第19、20、21、22図中に書きこんでいるのでそちらを参照されたい。以下は個々の遺物について記したい。第24図に掲げたのは、全て黒曜石製の鎌である。

1は、丁寧な押圧剝離で整形したやや大型の円基鎌である。縦4.0cm、横2.1cm、厚さ0.8cmを測る。2は丁寧な押圧剝離で整形した鉢形鎌である。縦2.8cm、横1.5cm、厚さ0.4cmを測る。3、4は剝片に最小限の加工を施した、平基無茎鎌である。3は、片面は自然面が残り、片面は剝離面が広く残る。母岩から最初に剝離した剝片を利用したと思われる。縦2.1cm、横1.7cm、厚さ0.25cmを測る。4は両面とも広い剝離面が残っており、剝離技術の高度化が伺える。縦1.95cm、横1.5cm、厚さ0.25cmを測る。2者とも製法が近似していること、ごく近くから出土していることから、同一に人が作った可能性が高い。5は、全面押圧剝離によるが、左右が非対称形で粗雑な調整である。縦1.8cm、横1.4cm、厚さ0.45cmを測る。6は、凹基無茎鎌の欠損品である。遺跡の性格から考えて製作中に失敗、放棄したものと思われる。7は、ほんの一部しか残っていないが、凹基無茎鎌の基部であろう。両面とも丁寧な押圧剝離を施しているが、根元で折れている。製作途中の欠損品と思われる。8は木製品である。三角形に近い剝片を利用して辺に押圧剝離を施そうとしているが、断面の歪みが著しく、製作には不向きと考えたのであろう。途中で放棄している。縦2.9cm、横1.9cm、厚さ0.5cmを測る。

第25図は、いずれも黒曜石製の大型サイドスクレイパーである。

1は、基本的には大きな剝片を利用しているが、細かく丁寧な剝離を繰り返し整形している。3辺が刃部として利用できそうだが、1番念入りに刃部形成を行っているのは下部の長辺である。縦4.7cm、横7.7cm、厚さ1.2cmを測る。2は、母岩から縦長剝片を剥ぎ取り、さらに平行した剝片を剥ぎ取って、両面を広い剝離面で形成しておおよその形を作っている。これもまた剝離技術の高度さを感じさせられる1点である。上辺の背には自然面が広く残るが、片面からのみ剝離を施している。握りのための調整と思われる。このサイドスクレイパーは下部の一辺についても主として片面からの剝離調整を施し、補助的に反対面からもわざかに剝離を施し、刃部形成をおこなっている。

第26図の1、2は黒曜石製のスクレイパーである。1は、剝片の辺を最小限に押圧剝離を施して刃部を形成したサイドスクレイパーである。剝片を剝いた際の打点がよく判る。薄い剝片の先端に、細かい連続した押圧剝離を整然と施した様は見事である。縦3.9cm、横4.7cm、厚さ1.5cmを測る。2は、剝片を利用したエンドスクレイパーと思われる。図示した下部の辺も鋭利で刃部として利用できそうだが、加工は片側のサイドに集中している。縦2.7cm、横4.5cm、厚さ1.0cmを測る。3は、石材は安山岩質で、もともとは打製石斧であったと思われる。ところが上半部を欠損した段階で、スクレイパーとして転用した可能性が高い。縦7.0cm、横6.5cm、厚さ1.3cmを測る。

第27図1は、黒曜石製のサイドスクレイパー、もしくは刃部に凹凸が見られるため鎌であるかもしれない。縦3.3cm、横4.1cm、厚さ0.8cmを測る。2は、黒曜石製のエンドもしくはサイドスクレイパーである。剝片の薄くなる先端部分を利用して、片面のみから押圧剝離を細かく連続して施し刃部を形成している。図面化した下部は欠損したものと思われる。縦2.8cm、横2.3cm、厚さ0.45cmを測る。5は、黒曜石製で、縦長剝片の薄くなる先端部分に、少々の押圧剝離を施して刃部を形成している。縦

4、6cm、横2、8cm、厚さ1、5cmを測る。4は、黒曜石の大きな剝片である。打点の位置がよく判る。製品にはなっていない。縦3、5cm、横6、3cm、厚さ2、2cmを測る。

第28図は、全て黒曜石製の未製品・剝片である。1は、母岩から最初に割いた剝片で、片面にはほとんど風化面が残っている。打点の位置がよく判る。鎌もしくはスクレイバーを作りかけたらしく、剝離面側の先端部分を中心に少しばかり加工を加えている。縦5、0cm、横2、8cm、厚さ1、1cmを測る。2、3は石刃状剝片である。2は極小さなもので縦1、2cm、横0、35cm、厚さ0、15cmを測る。3は、縦2、2cm、横0、6cm、厚さ0、4cmを測る。4は石核であろう。縦3、3cm、横5、0cm、厚さ1、2cmを測る。5は剝片である。製品にはなっていない。縦3、1cm、横1、9cm、厚さ0、8cmを測る。6は剝片調整過程に川た小さな剝片である。縦1、4cm、横1、9cm、厚さ0、1cmを測る。7も剝片である。製品にはなっていない。縦2、0cm、横3、1cm、厚さ0、6cmを測る。8も剝片調整過程に川た小さな剝片である。縦1、6cm、横2、1cm、厚さ0、4cmを測る。9も剝片である。縦2、8cm、横1、85cm、厚さ0、5cmを測る。10も剝片である。打点の位置がよく判る。縦2、8cm、横2、5cm、厚さ0、3cmを測る。

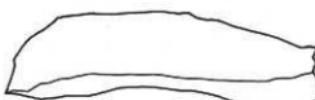
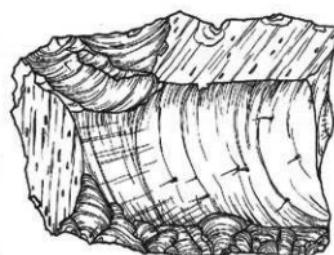
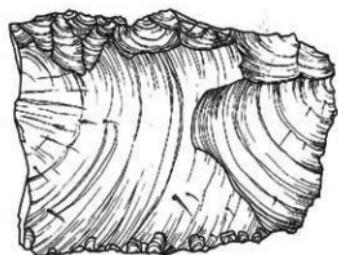
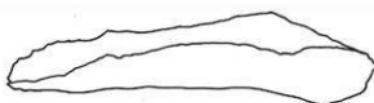
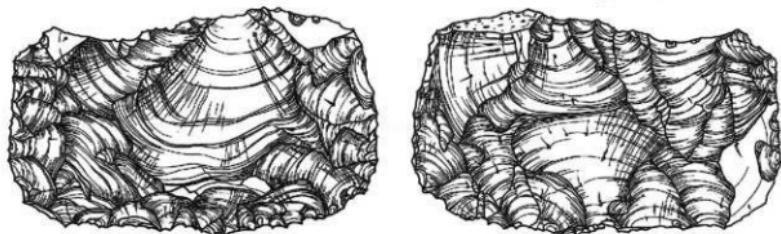
以上、実測図は原寸大で載せているので必要ないかとは思ったが、簡単に図面化した石器について記してきた。これらの図面化した石器の他に多くの微細な押圧剝離片が多量に出上していることも書き添えておきたい。なにしろ微細なもので図面化はしていない。

ところで、この遺跡から出土した石器について共通点をあげるとすると、石材が黒曜石であるという事から当然なのかもしれないが、いずれも高度な剝片製作技術を基本にして石器を製作しているということだ。押圧剝離で全面加工を施す事が多い鎌においてさえ、うまく断面平坦な三角形の剝片を剥ぎ取り、周囲に最小限の押圧剝離を施して成形している。片面全面に自然面が残る鎌製品も出土した。これは母岩を限りなく有効に利用するための技術のもとに製作された鎌と思われる。スクレイバーもまた剝片を剥ぎ取り、剝片の形を最大限利用して、わずかな加工を施す事によって製品となしている。

これらの遺物の時期については、土器が出土していないため明確なことがいえない。石鎌の形態で編年も試みられているが、柴尾遺跡から出土した鎌は、縄文期でも早い時代とされている第24図-1、2のようなものから、やや新しいとされている3~7のようなものまで、非常にバラエティーにとんだタイプのものがほぼ同じ遺構面、包含層中から出土している。これらは時代とともに変遷したタイプというより、複数の工人による個性であるかもしれない。遺物製作時期については、現時点では、縄文期の比較的早い時期に製作がおこなわれていた可能性が高い、と表現するしかない。来年度の調査区域拡幅によってさらに資料を増やして再度考察していきたい。

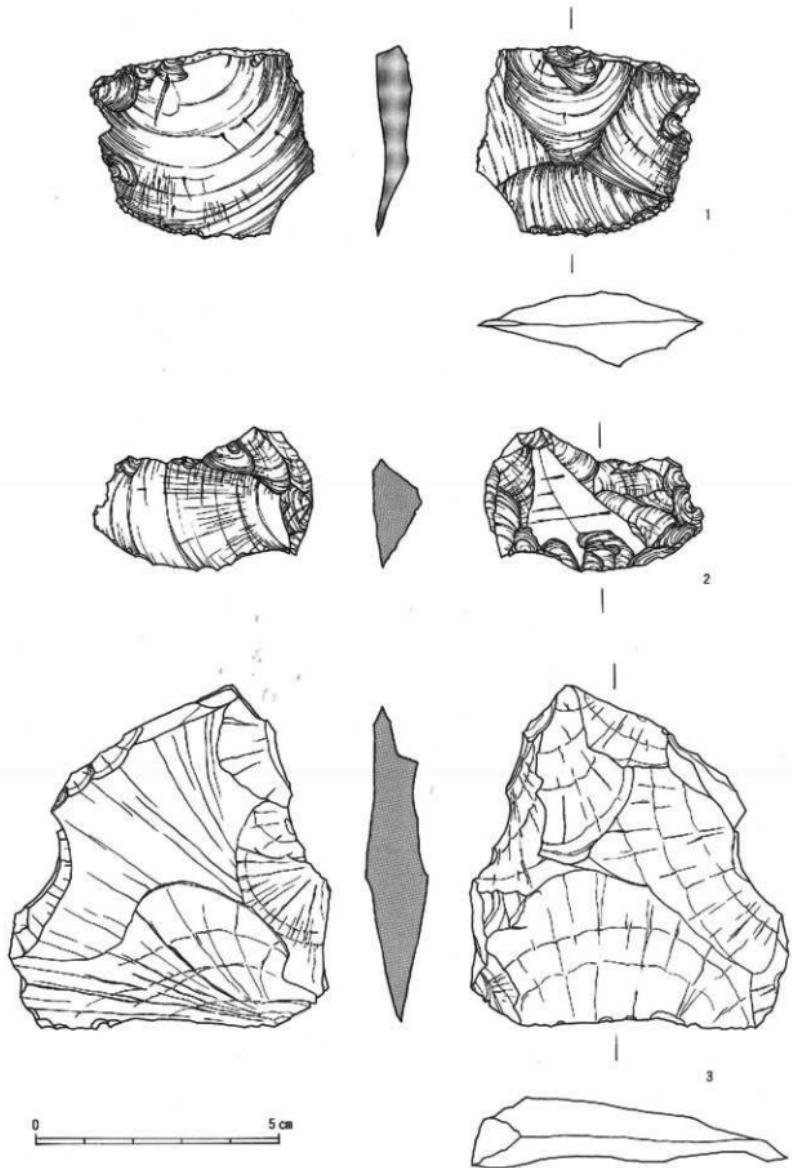


第24図 石器実測図

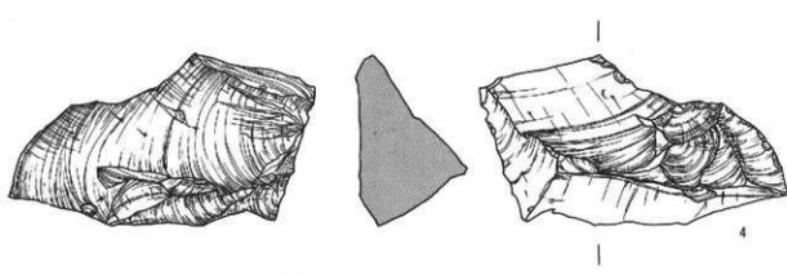
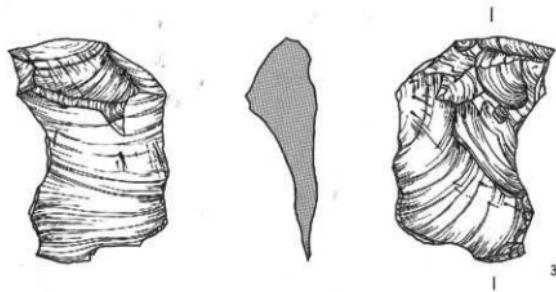
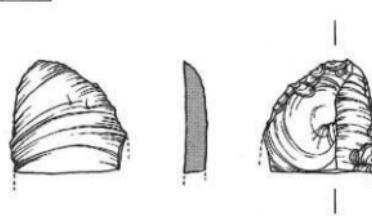
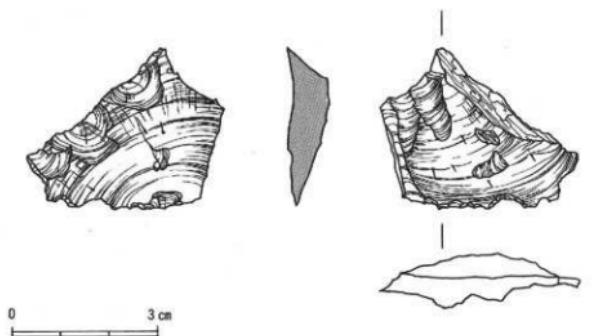


0 5 cm

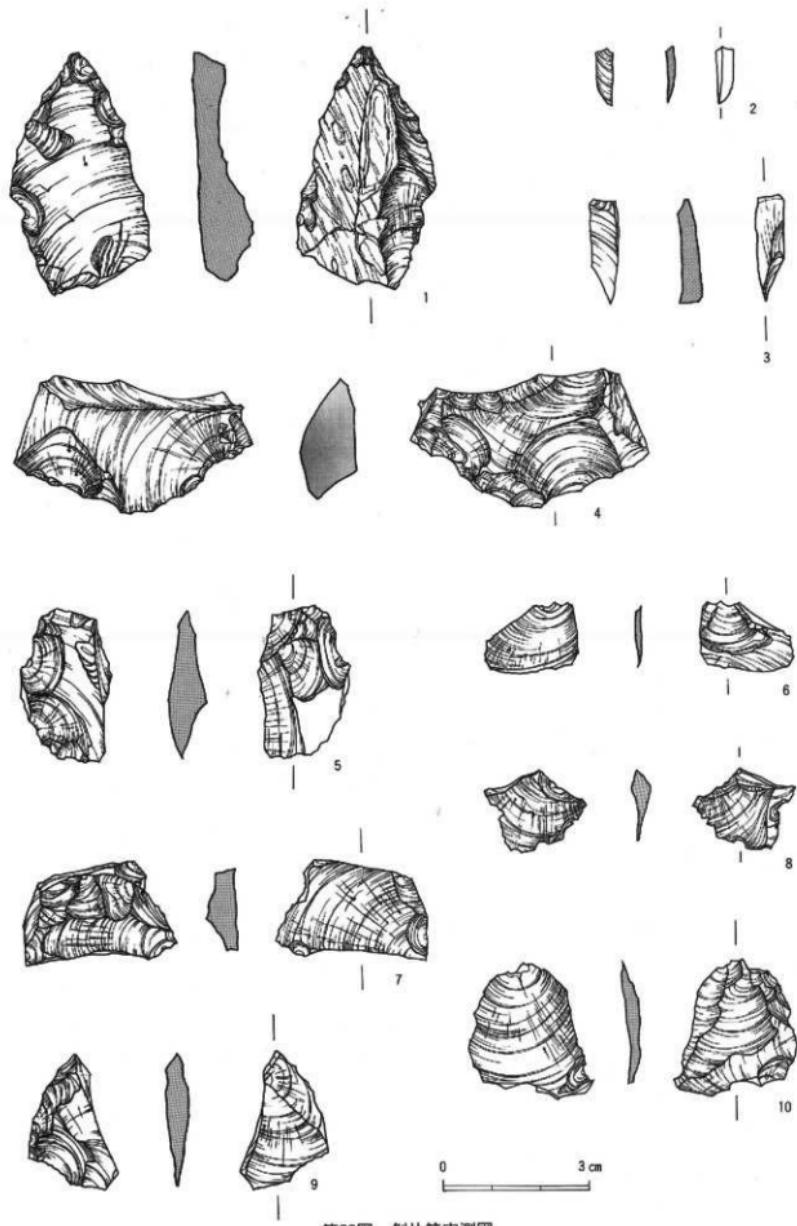
第25図 大型スクレイバー実測図



第26図 スクレーパー図



第27図 スクレイバー実測図



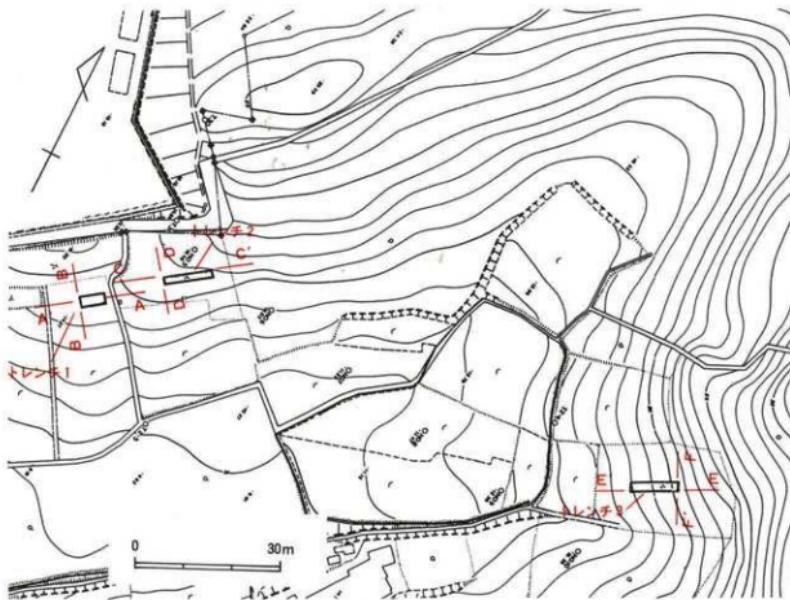
第28図 剥片等実測図

VII. 柴 遺 跡

柴遺跡の現状は畠地であったが、平成5年5月17日、分布調査の際土器片を表採した場所付近に、 10×2 mの試掘トレンチを3カ所設定して調査を開始した(第29図)。トレンチ1、2は南面する緩斜面で、トレンチ3は西面する緩斜面であった。

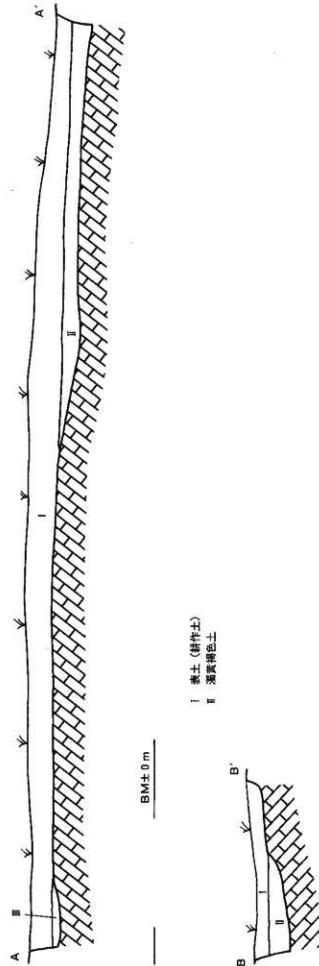
調査の結果、トレンチ1では表土の下に黄褐色土が堆積し、その下に地山の濃赤褐色土が認められた。トレンチ2では表土の下に赤褐色土、黄褐色土が堆積し、その下に濃赤褐色土が認められた。トレンチ3では表土の下に褐色土、黑色土、明褐色土、黄褐色土が堆積し、その下に地山の濃赤褐色土が認められた(第30図)。

しかし、トレンチ1、2、3とも、遺物は1片も出土せず、遺構も検出できなかった。分布調査の際に表採された遺物は、どこか周辺の遺跡から流れ込んだ単発的な遺物と思われる。したがって、周辺に遺跡を包蔵する可能性は高いが、少なくとも、試掘調査を実施した開発計画区域内には遺跡は存在しないと考えられる。

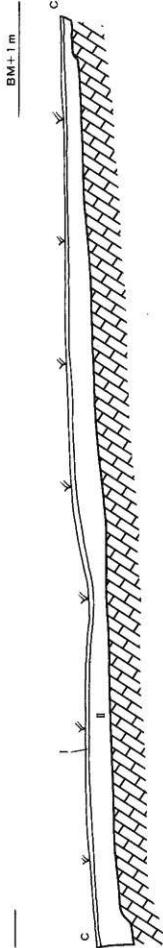


第29図 柴遺跡試掘トレンチ配置図

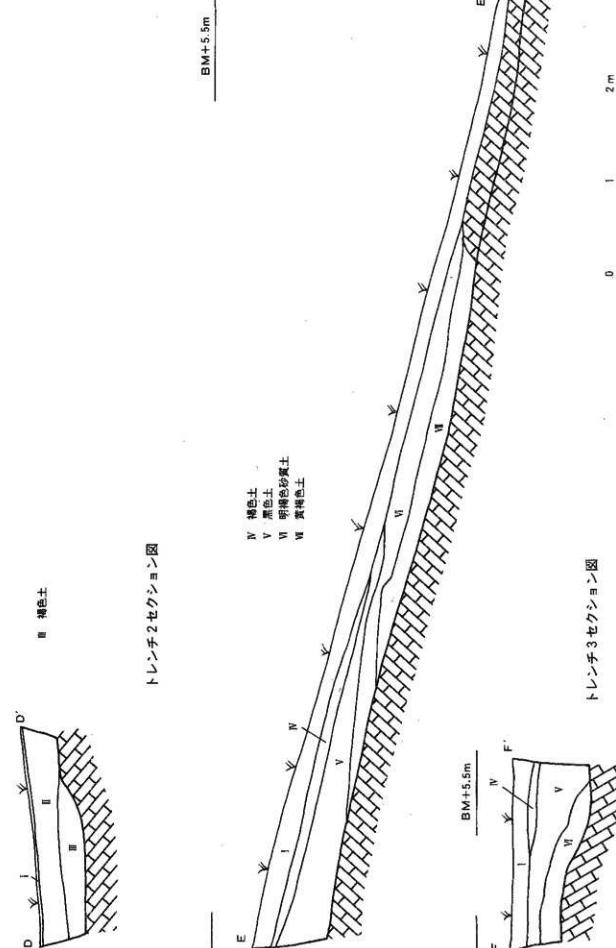
BM±0 m



トレンチ1セクション図



トレンチ2セクション図



トレンチ3セクション図

第30図 柴道試掘トレンチ(1~3)セクション図

VIII. 小 結

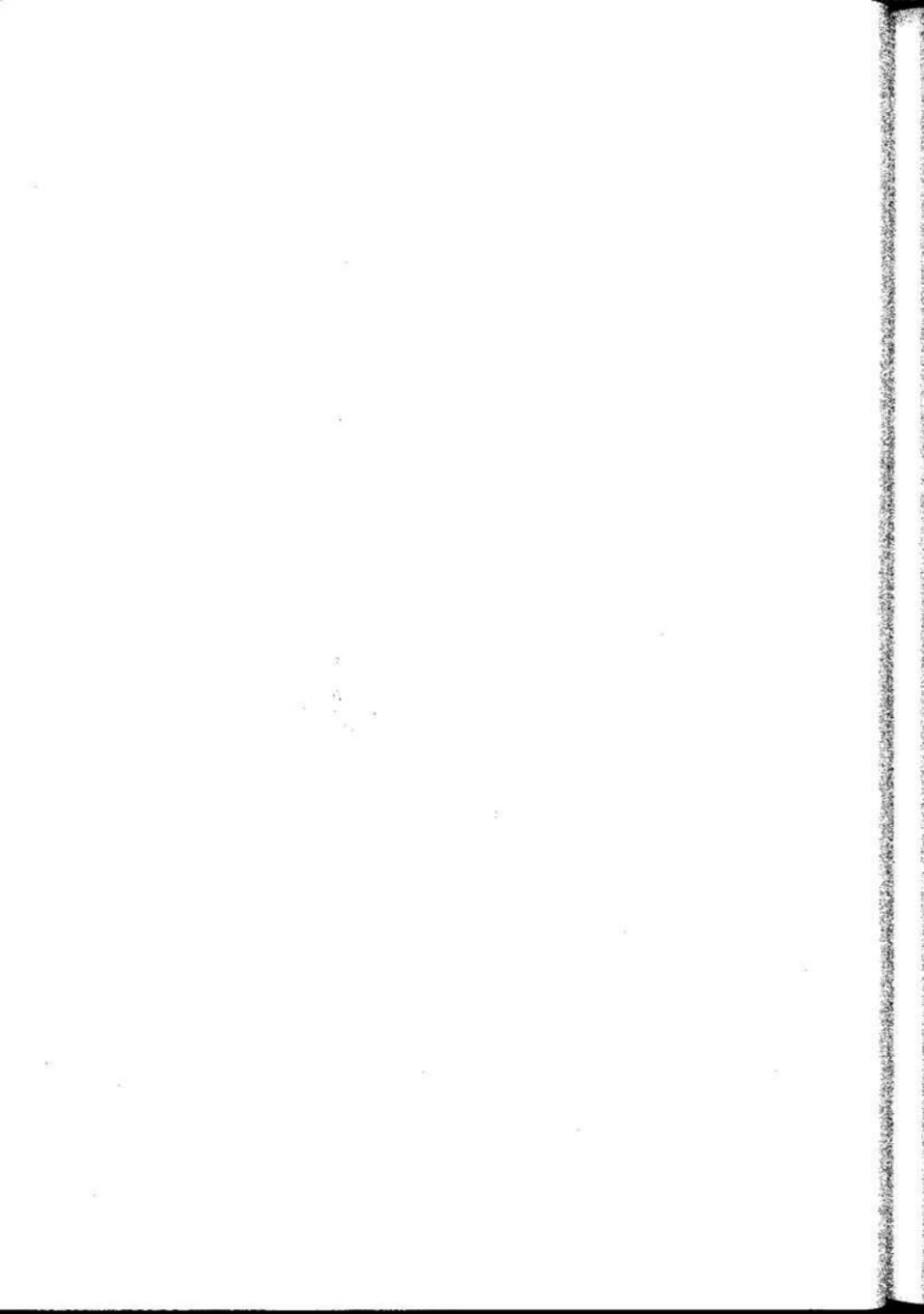
柴尾遺跡の今年度調査区域では、古墳時代の遺跡として、前期の方墳1基、後期の方墳1基、礫床の組み合せ石棺1基、前期古墳と思われる方墳の周溝の1辺が検出された。これらの中で、柴尾2号墳は比較的の残存状態がよく、ほぼ全容がわかる好史料を得る事がことができた。

柴尾2号墳は古墳時代前期の小規模方墳であった。地形的には低丘陵の尾根上ではなく、丘陵の肩の部分に築造されている。高い部分に周溝を掘り、低くなっている緩斜面に盛り土をしているが、周囲より一段高くなっているという印象をあまり受けない。主体部はいずれも土壌で3ヵ所に作られていた。副葬品は鉄鏃1点のみであったが、主体部のうち2つが剖竹形木棺の直葬で、古墳時代前期の有力者特有の埋葬形態をとっていた。

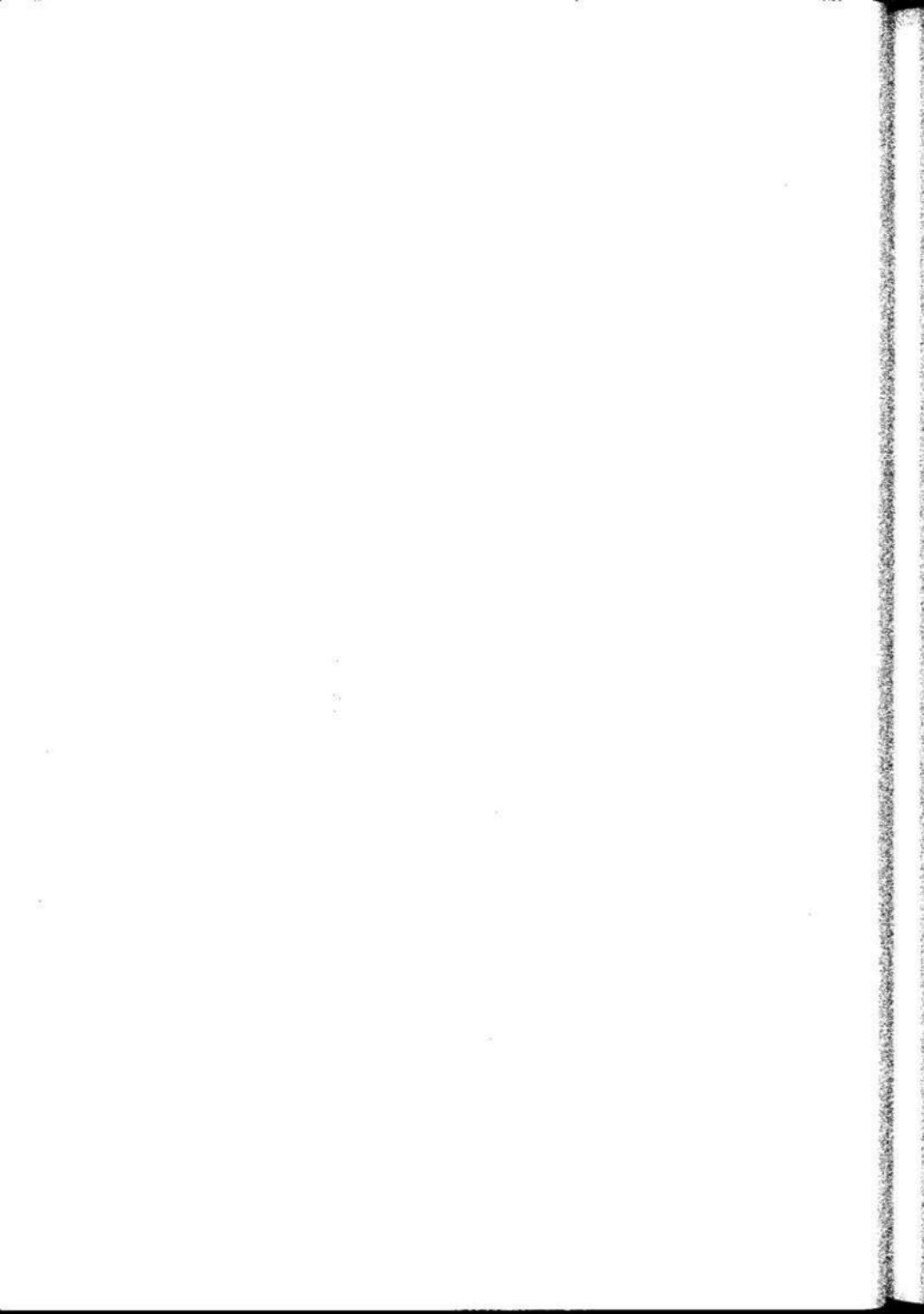
墳頂や周溝内からはたくさんの古式土器が出土し、それらは柴尾2号墳が4世紀後半から4世紀末にかけて築造され、追葬されてきたことをものがたっていた。また、墳頂から出土した2個体の壺・甕は、鳥取県東部を中心に展開した古式土器の特徴を持つもので、地域的なつながりを感じさせている。特に頸部に突帯のある二重口縁の壺は、鳥取県米子市までは住居跡等でふつうに分布しているが、島根県にはいると突然分布の希薄地域となる。島根県内の出土例は現在のところ三刀屋町の松本1号墳、鹿島町の草田部遺跡の2ヵ所のみで柴尾2号墳が3例目である。また、もう1個体の單純口縁の甕は口唇部が肥厚し内面に突出するタイプのいわゆる布留式甕であるが、これも鳥取県東部でごく一般的に分布している甕である。弥生時代末から古墳時代初めにかけて、西谷3号墓など墳丘墓・前期古墳の墳頂に古備系の土器が供獻されている例は多いが、ここでは山陰東部系の土器が供獻されていた。このような例は今のところあまり報告されていないが、この事実が意味するところは大きいように思える。

さて、古墳時代の遺構面のさらに下から石器生産遺跡が検出された。土器が1片も川上していないためその時期については解っていない。今回は4グリッドについてのみ調査を実施したが、トレントで観察したところその範囲はこの丘陵尾根上平坦面全面に広がっている可能性が高い。かなり大規模な石器生産遺跡が残っていると考えられるため、ここで石器を生産した工人達の生活遺跡も付近に埋もれているに違いない。今年度調査していない平坦面、緩斜面はまだ広い範囲で残っている。石器生産の背景にある人々の生活についても、来年度の調査で少しでも明らかにされる事を願っている。

また、柴尾3号墳についても来年度調査する予定である。これも2号墳とほぼ同時期の古墳と考えられるが、これを調査すれば、この地域の前期古墳のあり方、様相がより明解になってくるであろう。在地豪族がどのように古墳による埋葬を取り入れていったのか、どの地方の影響を強く受けているのか、ひいては社会構造まで解明できるかもしれない。注目していきたい。



図版





図版1 発掘前尾根上平坦面と柴尾1号墳遠景



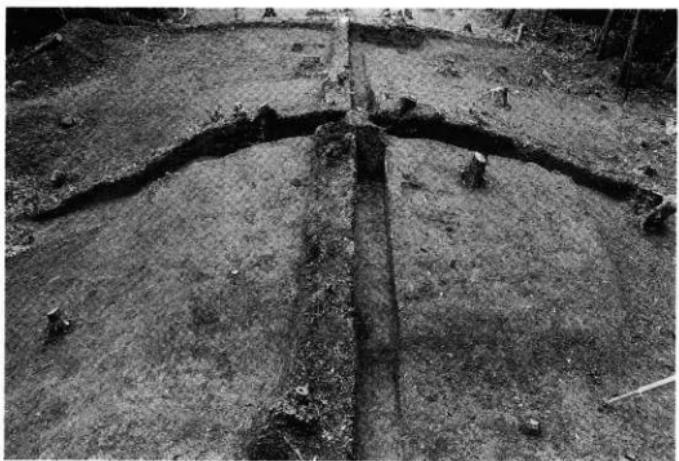
図版2 発掘前尾根上平坦面と柴尾2号墳（右側マウンド）遠景



圖版 3 柴尾 1 号墳発掘前近景



圖版 4 柴尾 2 号墳発掘前近景



図版5 柴尾1号墳残丘検出状況（南より）



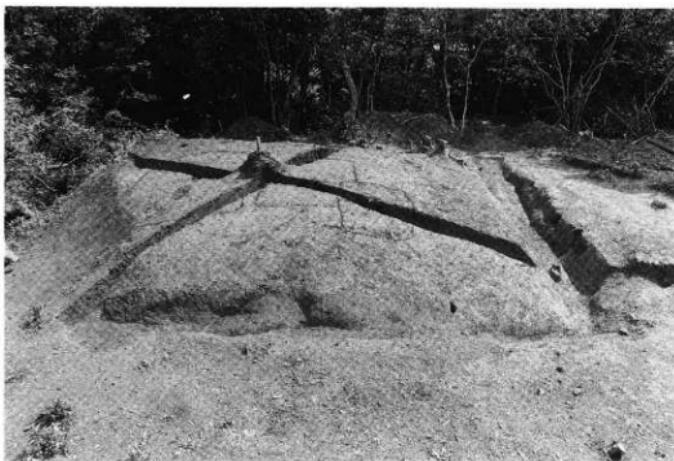
図版6 柴尾1号墳周溝セクション（西より）



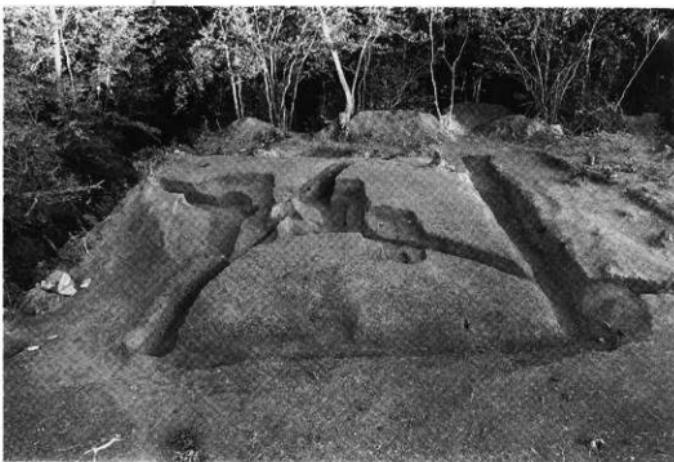
図版7 柴尾2号墳作業風景



図版8 柴尾2号墳周溝セクション（南より）



図版9 柴尾2号墳主体部平面プラン検出状況



図版10 柴尾2号墳主体部完掘状況



図版11 柴尾2号墳墳頂供獻土器出土状況（東より）



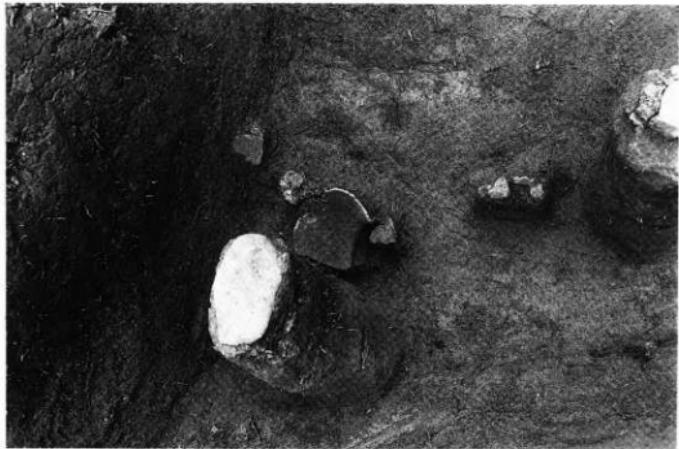
図版12 柴尾2号墳周溝内遺物出土状況（北西より）



图版13 柴尾2号墳周溝内遺物（第17図2）出土状況



图版14 柴尾2号墳周溝内遺物（第16図1）出土状況



图版15 柴尾2号填周沟内遗物（第16图2）出土状况



图版16 柴尾2号填周沟内遗物（第17图1）出土状况



図版17 1号主体部完掘状況（東より）



図版18 1号主体部鉄鎌出土状況（西より）



図版19 墳頂祭祀遺構検出状況（2号主体部直上）



図版20 2号主体部 2段掘り土壤検出状況



図版21 2号主体部セクション



図版22 1号主体部（手前）と2号主体部（奥）



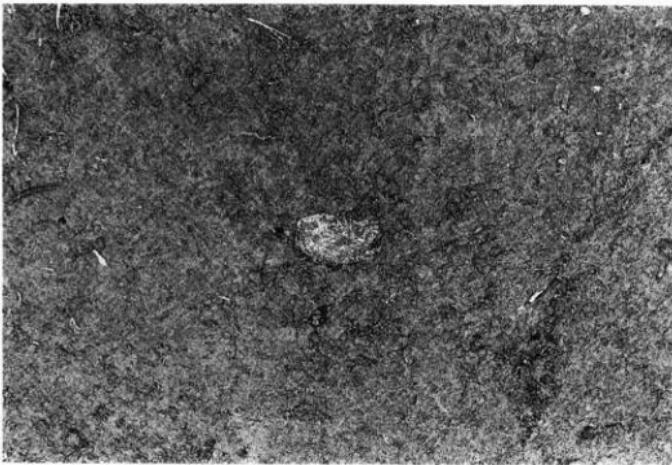
図版23 3号主体部完掘状況（東より）



図版24 3号主体部完掘状況（南より）



図版25 石器検出作業風景



図版26 石器（第25図1）出土状況



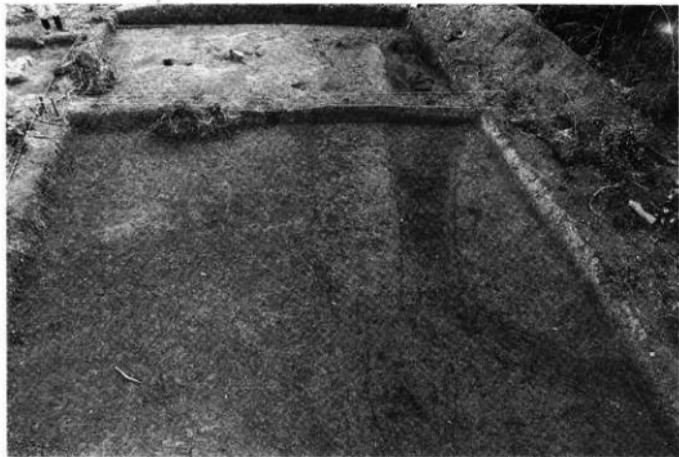
図版27 尾根上平坦面地山検出状況（手前が2区）



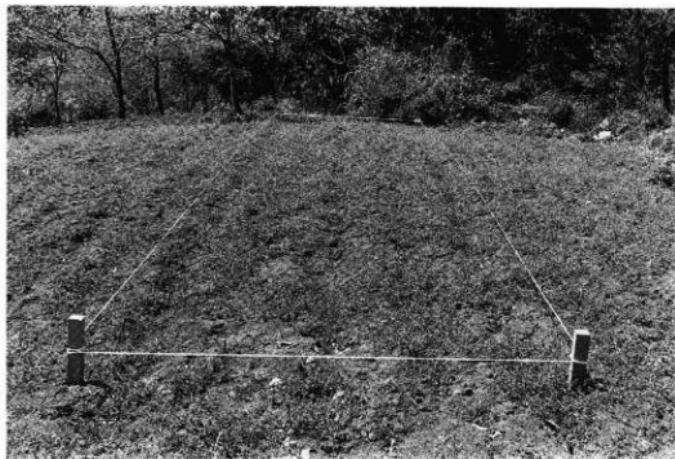
図版28 1区完掘状況



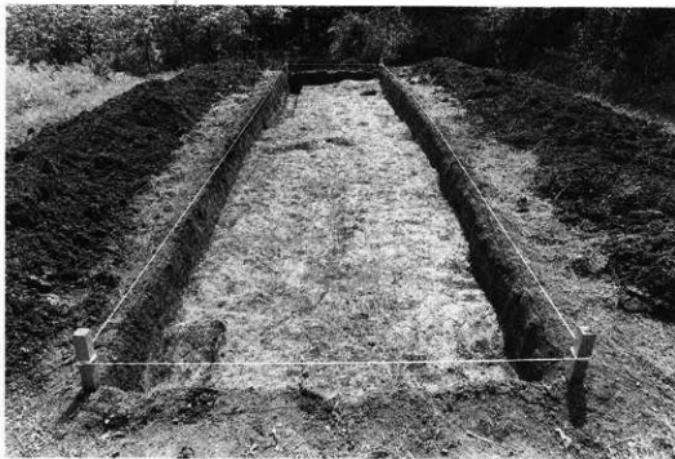
図版29 4区半壇組み合せ箱形石棺検出状況



図版30 柴尾3号墳周溝検出状況



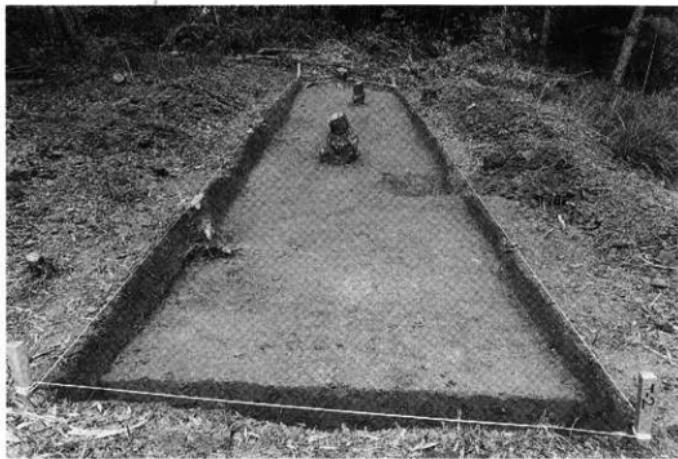
図版31 柴遺跡トレンチ1発掘前近景



図版32 柴遺跡トレンチ1完掘



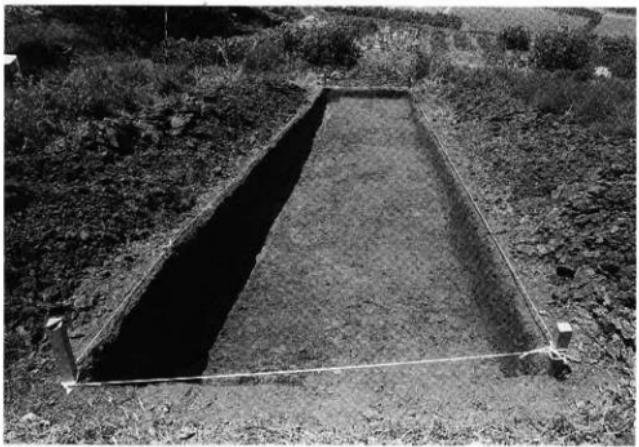
図版33 柴遺跡トレンチ2発掘前近景



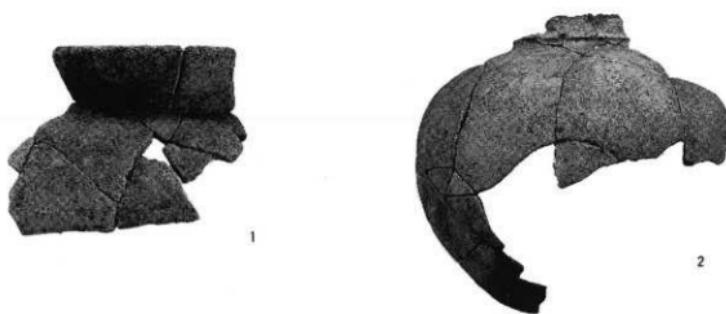
図版34 柴遺跡トレンチ2完掘



図版35 柴遺跡トレンチ3発掘前近景



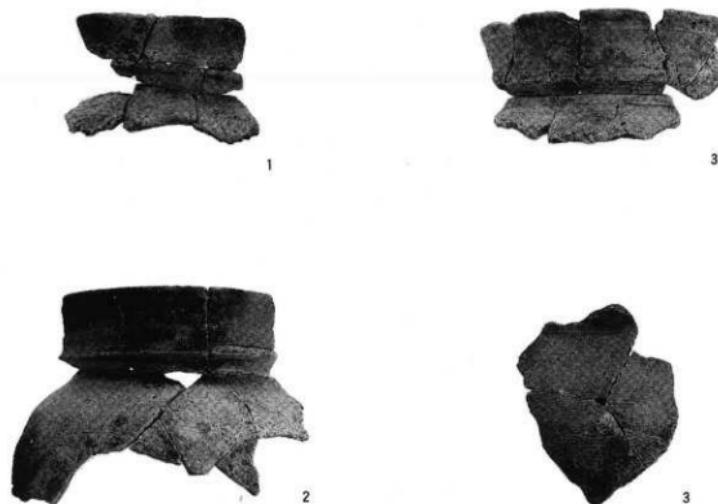
図版36 柴遺跡トレンチ3完掘



図版37 柴尾2号墳墳頂供獻土器（第15図に対応）



図版38 柴尾2号墳周溝内出土土器（第17図に対応）



図版39 柴尾2号墳周溝内出土土器（第16図に対応）



図版40 柴尾2号墳1号主体部出土鉄鎌



図版41 柴尾遺跡出土石鏃（第24図に対応）

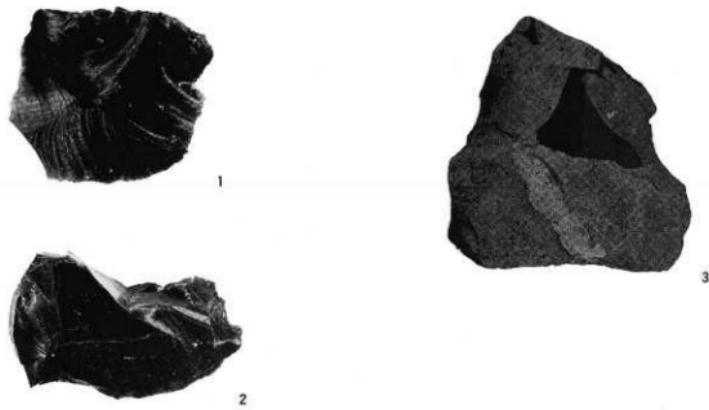


1

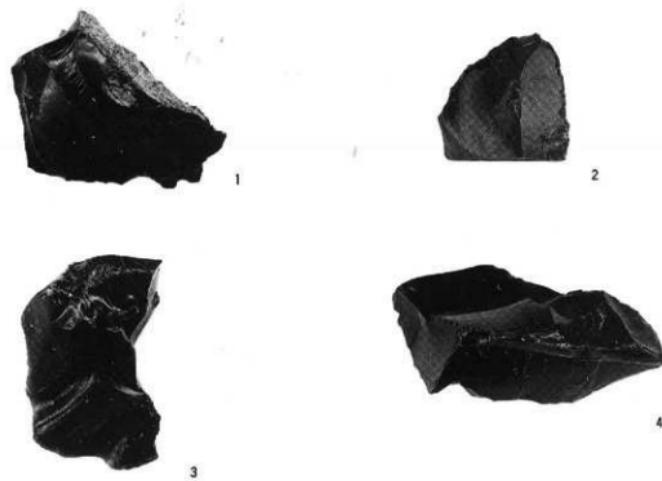


2

図版42 柴尾遺跡出土大型スクレイバー（第25図に対応）



(第26図に対応)



図版43 柴尾遺跡出土スクレイパー (第27図に対応)



図版44 柴尾遺跡出土石器未製品・剥片（第28図に対応）

柴尾遺跡発掘調査書(1)

1994年3月

発行 鳴松江市教育文化振興事業団
印刷 有限会社 高浜印刷所
松江市北堀町8